様式２の１

記　入　日　　2023年　6月　13日

［　助成団体名　］

一般社団法人環不知火プランニング　内　「水俣から學ぶティーチャーズネットワーク」

２０２２年度　「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書

企画テーマ	水俣病学習を行っている教員へのヒアリングと教育現場での「水俣からの学び」を具体的に知るオンライン研修会とその記録保存。また、当時激震期の水俣を知る教育関係者へのヒアリングと記録保存。 また、神戸で莫大な画像記録を行っている施設団体での現場研修。
取り組み実施期間または日時	2022.10.1～2023.3.31

【取り組み目的】

『水俣からの学び』の拡がりと継承

水俣病学習を行っている教員や関係者へのヒアリングと教育現場での「水俣からの学び」を具体的に知る研修会やその記録と保存と活用の仕組みづくりを行いました。

ここ数年で当時の様子を知る教員が定年退職を迎え、同時に高齢化して、水俣病の教育遺産存続の危機を迎えていると言えます。その足跡を学ぶことは、社会課題の根っこに同じような構造があるため、水俣から各地に持ち帰り、それぞれの教育現場に活かすためとても有効であると考えます。患者さんの想いを受けて、情熱的に水俣病学習に取り組まれたかたへのヒアリング。また、教員向け研修を行い、次の時代の先生へバトンを渡す活動をしました。コロナ禍で対面式の密集する研修を実施することは難しい時代になっていますが、一方で、オンライン環境が学校現場でも家庭内でも整っており、第３期の助成事業では、水俣地域内だけではなく、全国から参加者を募ることができました。

以上の成果物については、今期も先生が授業等で活用できるような仕組みを作りながら実施しました。今回の事業で「水俣から學ぶティーチャーズネットワーク」の活動を

知ってもらいつつ、若い教師たちがそれぞれの努力と工夫で熱量のある授業を継承している機運を水俣からの発信のみならず、水俣地域外からも発信していきます。

【取り組み内容と成果】

① 昨年度に引き続き、福岡県の中学校（筑紫野市立天拝中学校）で、水俣病を学ぶことによって、奮闘された先生（稲田泰典校長）の授業をオンラインで紹介していただき、教職員向けのオンライン研修を行いました。

② ①の内容について、冊子の形で記録保存し、環不知火プランニングホームページにサンプル掲載しました。申請いただければ教職員にデータ提供を行えるような仕組みにしました。

③ 水俣病激震期の時に相良村から水俣に通いながら、被害者の救済を行なった相良村教育長、緒方俊一郎先生にヒアリングを行いました。

④ ③の内容について、冊子の形で記録保存し、環不知火プランニングホームページにサンプル掲載しました。申請いただければデータ提供を行える仕組みにしました。

⑤ 神戸・淡路大震災の被災画像を記録し、神戸全体を担うまでになった「神戸アーカイブ写真館」の視察を行いました。

【備考欄】

■構成メンバーについて
・主宰
一般社団法人環不知火プランニング 代表理事 森山亜矢子

・アドバイザー
大阪市立大学 除本理史
中央大学 大野新

・小学校ティーチャーズ
神戸市立小学校 校長 竹中美香子
神戸市立小学校 教員 吉田かよ子
神戸市立小学校 教員 坂本祐樹

・中学校ティーチャーズ
筑紫野市立中学校 教員 坂田康亮
佐賀学園成穎中学校 教員 渡邊和仁

※適宜、水俣葦北公害研究サークルの先生にアドバイスいただきながら実施。

2022年12月29日（木）

緒方医院院長、相良村教育長

緒方俊一郎 先生

ヒアリング記録

水俣市のすぐお隣り、相良村で生まれ育った緒方先生が、どのように水俣と出会い、積極的に関わり続け、医師として水俣のできごとをどのように考えているかをお話しいただいた。

主　　催	水俣から學ぶティーチャーズネットワーク
共　　催	（社）環不知火プランニング
助　　成	熊本みらい基金
協　　力	食・農・人総合研究所リュウキンカの郷　代表・本田節
聞　き　手	神戸市立小学校　竹中美香子、（社）環不知火プランニング　代表・森山亜矢子
コーディネーター	（社）環不知火プランニング　代表・森山亜矢子

緒方医院院長、相良村教育長

緒方俊一郎 先生

ヒアリング記録

2022年12月29日(木)

内容:水俣市のすぐお隣り、相良村で生まれ育った緒方先生が、どのように水俣と出会い、積極的に関わり続け、医師として水俣のできごとを医師としてどのように考えているかをお話しいただいた。

森山:今日はお忙しいところをありがとうございます。1時間ぐらいお話を聞かせてもらってよろしいでしょうか。水俣と出会うきっかけは、原田先生と出会う前にあるように思いますが。

緒方:大学に入った(1963(昭和38)年11月に三井三池の炭塵爆発が起きました。

九大一内科教授「勝木司馬之介氏」は、熊本大学内科教授として昭和33年から35年まで熊本大学の内科教授として熊本大学の水俣病研究班に所属していたので水俣病の研究にもタッチしていました。この人が、専門課程の時に臨床講義で三井三池のＣＯ中毒患者さんを連れてきて、説明をしてくれました。(5年生の時、中枢神経＝脳に後遺症を残している患者さんを目の前にして説明をしたのです。)

炭鉱爆発事件の前ですが、教養課程を終えて、医学部に移った際(３年生)に サリドマイドの障害児支援グループが早稲田大学からやってきて、サリドマイド児についての報告をし、救援活動をしていることを話してくれました。大変なことが起こっていることを知り、同様の活動を九州でもやろうかと話が出て、支援活動に参加した。

その頃は、いろんな問題が起こっていて、薬害問題、例えばスモン病をはじめ(風邪薬キセナラミン事件)クロロキン、その他いろいろな薬害問題が起こっていたし、またベトナることは、まあ知っていたわけです。そして、5年生の時に 1968年カネミ事件が起こったのです。でその時に授業で講義をした九大の皮膚科の講師が、「実は俺はごく最近変な病気が出てきたことを知った。発熱や身体のだるさを訴えたり、黒いニキビができたりろ

んな症状が出る病気が起こっている。その原因物質も自分としてはほぼつかんだ。しかし、もっと症例をたくさん集めて それを学会でどかんと発表して、名前を売りたい。」というようなことを言ったのです。その言葉を聞いて「それはおかしいのではないか？」おかしなこと言うなと思ったのです。「医者であればそういう病気が発生しないように世間に知らせる、少しでも早く社会に知らせる」ということが、大事なんじゃないのと同期の仲間と考えました。

実は、戦後の医師養成課程はGHQの指令により、6年間の大学課程修了後１年間無給で病院での実地修練(インターン)をして後に国家試験を受けるという制度が取り入れられていました。先輩たちが長年反対運動を続けてきたのですが、僕らの卒業する前の年から 医学部を卒業し、１年間インターンをやったのちに国家試験受ける制度がなくなり、卒業と同時に医師国家試験を受験できるという制度に変わったのです。しかし、それに変わる卒後研修制度を国が作っていなかったのです。そこで自主的に研修をやろうとカリキュラムを自分たちで作ってやり始めた。医学部ではそのインターン闘争の中から全国的に学生運動がおこり、その中で「東大の闘争」があったわけです。九大医学部でも呼応する形で、インターン廃止運動に参加し、「学問は、誰のためにあるのか」「医療はどうあるべきか」と。患者のために我々は医者になろうとしているのに医学部はどうもおかしいのではないかということで、外科研究棟と言われていた建物一棟を封鎖し、先輩の医者や研究者たちが出入りできないようにしてしまい、大学の教授会と医学や医療の問題について話し合いをしました。

そういう運動の最中、1969年に米軍基地に帰ってくるファントムが墜落した事件が発生しました。学生たちは「機体を象徴としてそのまま残せ」と主張し、討論会やデモをやりました。そう言った運動のさなかに我々の年代から卒業と同時に国家試験を受けて医師のライセンスが取れるということになり、私たちの学年は6月に医師免許を取ったのです。

私は医師免許を取るとすぐ原田正純先生のところに「水俣病について教えてください」とお願いしに行ったわけです。当時、先生は講師でした。熊大では昔の精神神経科の木造研究棟におられた。「俺のとこに来るよりも水俣に行って直接患者さんの話を聞きその状況を見せてもらって、診察させてもらえ」と言われたんです。その時は僕一人で原田先

生に会いに行きました。その後は、仲の良い一級上の友達と水俣に一緒に行くようになりましたが、その頃は、まだ新幹線はもちろん、高速道路もなく国道三号線や鹿児島本線を利用しました。

水俣に行って、いろんな人がいましたが、堀田静穂さんが活躍し始めておられ、案内してもらいました。最初はどうやって行ったのか覚えてないけど、たぶん彼女の案内で芦北町の女島に行ったのです。女島に行って、そこで重症の患者さん、小崎弥三さんの寝てらっしゃる姿を見て、言葉も出なかった。脳卒中最重症者と同じような状態で声も出ず手足も動かせない状態だったのでショックを受けました。大変な病気だというのが水俣病の患者さんを見た最初の印象です。
それから後、原田先生が水俣の患者さんを診察に行かれるときに熊大の学生と一緒について行きました。熊大では、学生たちが地域医療研究会をやっていた。その地域医療研究会に集まってきた医学生や看護学生と出月、月浦、茂道などをはじめ水俣病多発地帯を一緒にあちこちに行ったり、勉強会をやったり、夏休みに１週間合宿をして勉強会などもやりました。合宿したのは、そのころ、浴野成生さんや鶴田和仁さんたちがまだ学生だった。その人たちと活動を何年かやりました。地域医療研究会の人たちと一緒に御所浦島にも行きました。御所浦には最初のうち水俣病はいないということになっていたのですけど、行ったら立派な水俣病の方がたくさんいるじゃないのっていうことです。その時も数日間泊まり込んで調査をし、汚染のひどさにびっくりしました。海は繋がっているのだから当然ですね。白倉さんという御所浦の患者さんのリーダー的な人たちともお会いしました。

71年、相良村に帰って村医者になったのですが、村に帰って診療を始めると驚いたことに農薬中毒の患者を多数診ました。有機リン系の殺虫剤としての農薬で、いわゆるサリンの仲間による中毒患者です。それからカーバメイト系とかクロールピクリンとか、いろいろな農薬で農家の人たちが倒れていて、これはおかしいと思いました。健康維持や命をつないでいくための農業で、農作物を作る人たちがその作業で死んでいくのは大変なことじゃないかと。私も勉強をして、緊急の場合、田んぼの畦道で点滴したりしたこともありました。そういう状況を体験して、「医者っていうのは やっぱり出来上がった病気を治すということじゃなくて、病気にならないようにするということが非常に大きな

仕事なんじゃないか」ということをまたそこでも痛感したわけです。水俣病の原因をチッソは知っていて流し続けたわけです。水銀を使い続けたわけです。それはとんでもないことです。全く知らないで流しているのと知っていながらやっているというのは、大きな違いで大変なことだと思う。それを行政、国や県もチッソの仲間になって隠蔽したということです。

それで 1980年ごろ相良村で 勉強をしようかと。農薬の問題だとか合成洗剤の問題だとかを「食べ物と健康の集い」という名前で、農家の人や学校の先生や地域の人たちと一緒に20人くらい、(多い時は50人ぐらい)集まって月に一回ぐらいの割合で勉強会をやりました。我が家では、(疎開してきたものを入れると多いときには30人近く暮らしていたので)農業をずっとやっていたのです。僕が生まれたのは1941年太平洋戦争の半年前です。戦時中のことは三歳ぐらいからの記憶はあります。戦争が終わったあとの食料問題があります。日本の国が、敗戦で非常に大変な時代にチッソは化学肥料の硫安など作って農家の増産に一定の貢献はしたわけです。けれども一方では、塩化ビニールを作る工程で水銀を流したりしていたわけです。そういった非常に大変なことになっている。相良村の中では農薬中毒をどうしたら減らせるかということで、農協に行って「農薬を売るな」と言ったこともありました。もちろんそうはしてくれませんが。
それから合成洗剤の影響だろうと思いますが、背骨曲がりがある川魚がたくさん見つかったりして、洗剤追放運動も勉強会の中に入れました。

1973年頃から数年間ですけれども、筋短縮症というのが社会問題となりました。症状は、「しゃがんだ時にかかとにおしりがつかない」なぜそういうことが起きるかというと、子どもの太ももやおしりあるいは上腕の筋肉に注射をするとそのあとがしこりになって筋肉の発達が不良になるわけですね。発育不良のために筋肉が伸びない症例が出てきた。最初は何故か、原因が分からなかった。山梨などで発見され、大変だということになってきたのです。九州山口広島注射による筋短縮症検診班を結成しました。私の同級生でもあった松本文六君たちが中心になってその活動を始めました。私も参加して県内で多発しているという天草へ検診に行きました。相当数の子どもさんがいて、整形外科医や小児科医も一緒に行き、手術をして治すことまでやりました。あのころの患者さんたちが今どうなっているのかは把握してないのですが。薬害もそうですけれども、本来

人を幸せにするべき医療が不幸というか薬害や医療過誤問題を起こしていると言うことについて大変なことだと思ったのです。

もう一つ言い忘れていたことがありました。卒業してすぐ、九大内科の教授がある患者さんの病気について論文を発表していました。ですが、この論文について、私の同級生が、一人の患者さんではなく、実は二人の患者さんのデータをくっつけてひとり分として出していたことに気づいたのです。それは大変なことだと言うことで、そのことを同級生が追求しました。そういう出来事の延長に青年医師連合による外科病棟の封鎖という出来事もあったわけです。本来、医療があるべき姿じゃないということで、私も若くて青春時代でした。医療の矛盾や医療が何のためにあるかという本質がおろそかになり、医学・医療が故意に捻じ曲げられていることをなんとかしなければという思いがありました。そのような思いで水俣病センター相思社を設立に参加することになります。水俣病の第一次訴訟裁判の時、患者のみなさんたちの健康を診るためついて行く人が必要だということで私が名乗りをあげました。健康管理の名目で随行したわけです。高野山まで行きました。大阪の厚生年金会館で浜元二徳さん、フミヨさんのきょうだいはじめ原告と支援者たちが株主総会に出てきた社長に詰め寄るのはこのときですね。

もう一つ言い忘れていました。裁判を始めた時に渡辺栄蔵さんが会長になった際に彼が「本日、ただいまより国家権力と対峙します。」ということをそばで聞きました。大したことを言うと感心して聞いてきましたが、それがずっと後年、私たちが川辺川ダム反対運動の時、この時のことを思い出します。やっぱり国家権力と戦うっていうのは大変なことだと。 相思社ができた後に「タケノコ塾」をやって、患者さんや市民と一緒に勉強会をやったこともありました。水俣病汚染地区のあちこちで患者さんを診せてもらいました。水俣の対岸にある獅子島(鹿児島県長島町)にも行きました。
ところで獅子島といえば、昭和38年から40年にかけて3年連続で球磨川の洪水があり、亡くなった方々がありました。亡くなられたのは土砂災害が主な原因と思われますが、球磨川から流され、その人たちのご遺体が何体か、獅子島に流れ着いていました。中には遺体の引き取り手がなかった方がいらっしゃって、その人たちは 御所浦島に無縁仏として埋葬してあると獅子島でお世話になった藤本さんがおっしゃっていました。そんなところでも川辺川、球磨川との縁があるのか！と思ってびっくりしたことがあります。

話は変わりますが、82年頃、この地域で最高峰の市房山を中心に九州中央山地国定公園に指定されることになりました。国定公園の指定を受けると山の樹木を勝手に切ることができなくなります。そこで国定公園の指定を受ける前に宮崎県側の市房山が皆伐され数百町歩も天然林を切ってしまったのです。そのため伐採の10年後に崩れやすい真砂土の市房山の崩壊がりました。悪魔の爪で引っ掻いたようだという表現していましたが、とても無残な状態でした。その後、熊本県側でも国有林を切るという話が持ち上がったのです。それはとんでもないことだと反対運動が持ち上がり、祭り上げられて会長となり、署名活動して4万筆を県議会に署名を持って行ったことがあります。それから、球磨川共和国というのを池井良暢(よしのぶ)さんという方が大統領となって建国されました。何のためかというとJ R湯前線を残そうという運動をされたわけです。学校の元校長先生だった方です。

(ここで薪ストーブの火が消えてしまったため話題が変わる)

やっぱり薪とか炭とかを使わなくなったから山を見なくなった。僕が相良に帰ってきたころ、相良村の山中では電気がきてないところもありました。19 70年年ごろは、谷川で小水力発電をやっていた集落がありました。だけど、谷川の水は常に同じ水量じゃない。流れが大きくなったり小さくなったりそのたびに電灯が、蛍の光みたいに明るくなったり暗くなったりする。患者さんの家族中には、電気はあてにならないからと石油ランプに火をともしたのにはびっくりしました。まだ電気が引かれていない山中の集落に往診をしていました。
夜10時ぐらいに電話がかかってきて、「〇〇さんが倒れて意識がないから来てくれ」と言われたことがありました。行ったことのない初めて聞く山の中の集落名ですので、県道まで集落の入り口まで行くから迎えに来てくださいとお願いしました。車を降りてそこから30分、暗い山道を歩いて登って行きました。行きついたら患者さんは脳梗塞で意識がない。その頃は、熊本市にもレントゲンC T撮影装置もなく、今のような救急車もない時代でした。とりあえず応急処置をして、翌日また往診しました。地域の人に戸板で担架を作ってもらって車の通る県道まで運び下ろして、そこから車に乗せて私の医院に連れて帰って入院してもらいました。一ヶ月ぐらい意識がなかったけど、だんだん元気が出

てきて半年くらいして家に帰ってもらい、室内を這い回ることができるようになりました。一番遠くて、すごい場所は、五木村の掛橋(かけはし)というところでした。車を降りてから山道を登り、山を越えたら今度は谷を渡ってということを繰り返して2時間くらい歩きました。何回か往診したのですが、面白かったですよ。そういう山中に行くと医者が来ることは滅多にないわけです。「ようきなった！！」と、その患者さんの家では、「ご飯食べて行きなさい」と。ご飯だけじゃなくて、透明なお茶が出るわけ(笑)。味噌漬けイノシシの肉を囲炉裏で焼いてくれる。いい気分になって外に出ると、隣の家からも「せっかく来なったで、うちにも寄っていきない」と、また透明なお茶が出る。焼酎ですね。そして、帰りは時々転びながら山を下って帰る。道は木馬道(きんまみち)を歩きました。木馬道は、山で木を切って、橇(そり)に材木を積み、牛にひかせて運ぶための道で、手ごろな木を道に沿って横向きに並べた道のことです。そして、相良村に牛馱場(うしだば)という地名があって、そこに材木を集めて屈強な牛に材木を引かせていかだに組んで流す。そんな屈強な牛を集める場所だったのです。そういうところにも徒歩で往診もしていました。

それでまあ 相良村の状況もそんな風で、ダムを作る場所(ダムサイト予定地)のすぐ上流には藤田、野原という集落があったのです。そこには小学校もあり、最盛期には児童も120人ぐらいいました。1963年から1965(昭和40)年に洪水があったことから川辺川ダム計画がされた当時の建設省が1966(昭和41)年に発表し、藤田や野原ばかりではなく五木村の川辺川沿いの集落は強制的に移住させられた。その集落はもうひとっこひとり住んでない。そういう場所やその右左の山の中にも往診しました。

球磨川共和国の話に戻ると、もともと湯前線の廃止計画に反対し、存続をさせようという運動だったのです。2年あまりの活動の結果、球磨川鉄道は「くまがわ鉄道」として残るということになった。じゃあ球磨川共和国は解散しようという話になったが、せっかくこれだけの人が集まっていてもったいない、何らかの形で残そうということになった。じゃあ、何をしようか？川辺川ダムの勉強をしようか？ということで川辺川やダムのことを考えることになった。

その前ぐらいに僕はもう一つやっていたことがあって、ゴルフ場反対運動をやりました。(私が中３の時ですが、１９５６(昭和31)年四浦村と川村とが合併して相良村となりました。その合併で川村小学校、川村中学校が相良南小学校、相良南中学校になっていま

した。)その相良南の小・中学校は飲料水として地下水を利用していました。その地下水の水源地にあたる場所にゴルフ場建設計画が持ち上がりました。「これは児童生徒の健康に影響が出るかもしれない。学校医としては見過ごすことはできない。」と思いました。相良村役場の横に、瀬戸堤(せとのつつみ)というのがあります。
その上流にあたる山江村の山を開いてゴルフ場を作ろうという計画が持ち上がったのです。ゴルフ場はものすごく農薬を使うわけです。水源地にあたる場所で農薬を使うとその農薬が何かの拍子に地下水に入って、小学校や中学校の生徒にとって大変なことになるのではないかと反対運動をしたわけです。その時もゴルフ場の勉強会を始め、いろんなことをやりましたが、となりの山江村の当時の村長さんに陳情というか抗議に行きました。村長さんが、昨晩のお酒の酔いが冷めないで赤い顔をして出てきたところを捕まえて、「ゴルフ場建設をやめてくれ」と詰め寄る。我々に同調する山江村の職員も含めて数名で行った。ちょうどバブルが崩壊した時に当たったから、山江村のゴルフ場はできないことになったのです。しかし、同時にゴルフ場を作ろうとした深田村にはできてしまった。山江村の方は、私たちが反対運動やったのと、バブル崩壊と重なって出来なかったが、深田村はできてしまった。深田村にもゴルフ場反対者がいたのですけれどもパワーが足りなかったのですかねぇ。そんなこともありゴルフ場反対運動に参加していた人たちもダム反対運動に参加してきました。

森山:話が変わりますが、甘夏事件で相思社役員が総辞職して緒方先生の理事就任は、このタイミングですか?

緒方:そうですね。相思社の生活学校を作った時、うちに生まれていた子牛(メス)を連れて行ったのですよ。それを生活学校の生徒たちが飼っていましたね。
それから養生所の近沢一充さん(愛称:ちかさん)は、私のところに鍼灸師として週に一回、10年ぐらい患者さんの治療に来てくれました。最初、彼は水俣にはボランティア(水俣に移動診療所を作ろうというグループの一員だったと思います)で来たのです。ほかのボランティアと一緒にやっていましたが、「水俣病患者さんを何とかしないといけない。症状の改善するのはどうしたらいいか。」と考えていたのです。ある時、東京から女性の鍼灸師さんが水俣に見えて患者さんに針治療をしたら、気持ちがいい、楽になったと言うことで、相思社でもこういう事したらいいのではないかということで、近さんが鹿

児島の鍼灸師の学校へ行って鍼灸師の資格をとったのです。知りませんでしたか？

森山：知りませんでした。お話しすることはありますが、患者さんの話はよく聞くけれどもフォローした人や支援者の話を私たちも知らなくて、本人もそういうことを声高にいうタイプの人たちじゃないので、こっちからも聞かないことには言われないです。

緒方：彼もわざわざ北海道からやってきている。向こうで仕事がなかったわけじゃないでしょう。相思社に来る人たちはみんな優秀です。なんでこんな所に来るのかな？と(笑)。どこへ行ったって立派に仕事できる人ばかり。あなたたちも含めて、おかしいなぁと思います(笑) 物理学者だったり、研究室に残れば素晴らしい研究したというような人がいて、魚売りになったりする人もいたりいろいろ不思議な人がいる。
私は、ゴルフ場反対運動をして、山江村にはできなかった。その後、ダム反対運動に入った。池井先生が亡くなられたあと私が「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会(手わたす会)」の代表に推薦されました。その後 4年ぐらいで大学の後輩でもある岐部明廣先生と共同代表になりました。ダム問題について紆余曲折ありましたが、相良村長、人吉市長に続いて県知事がダム反対・中止を宣言したために、一旦、ダム中止になったわけです。相良村の徳田正臣村長と人吉市の田中信孝市長、蒲島郁夫知事。でも蒲島知事よりもその前の潮谷義子知事が民主主義の基本に則って県民集会を開きました。あれがものすごく大きかった。地域住民の生の声を聞いて議論しようというところがすごかったのです。熊本県の鎌倉さんが知事の意志を汲んでやってくれた。それでダム建設計画は一旦ストップしたけれど、10年間洪水防止の対策をしなかった蒲島知事が自民党

のダム推進派、あるいはゼネコンの意向に負けたのではないかと思われますが、作ると言う方向に転換してしまったわけです。蒲島知事以前の熊本県知事はこれまでは永くても三期で交代していました。長ければ弊害も出てくるためでしょう。現知事が例外的に4期やったということは、蒲島知事の前に何らかのエサがぶら下がったのかと話す人もいます。2年前の洪水を待っていたふしもある。だから洪水があってすぐ相良村に来て、ダムがあれば洪水は防げた、だから流水型ダムを作ると。そんなきっかけをねらっていたのでしょうね。どこからか力が働いてそう言う方向へ。

森山：ここまで来たらダムはできてしまうと思われますか？

緒方：わかりません。まだ方法がないことはないかなと思います。私も相良村の議会で聞かれました。徳田議員、前村長に。教育長はどう思うのかと。個人としては反対でダムを作るべきではないと言いました。教育長としてもそうなのだけど、個人としては絶対反対と言っています。現在の吉松啓一村長には、「ダムは反対だから」と言って教育長を引き受けました。国や県がダムづくりを餌にして、そのほかの政策を進めようとするわけです。村作りをして行くのにダムを反対し続けると財政的に干し上げてやるぞっていうような脅しをかけたりするわけです。本当は、それは関係ないことであり、卑怯な手を使うべきじゃないけど実際の政治の場ではあるのです。
そんなこと（財源を盾にした弱い者いじめのようなこと）が、ずっと水俣病認定についても行われてきたわけです。医学的な論争じゃなくてチッソとか国の思惑に従う方向で話が進められ、御用学者たちには研究費を代償にぶら下げ、研究者たちは、研究費が欲しいため、自分の思いと違うことを言わざるを得なかったのかなと思う。だから原田先生みたいな人は、稀有な存在。ほかにも例えば共立病院グループの高岡滋先生や藤野糺先生などをはじめ在野の医師のうちには、本当に真面目に取り組んできている人がいます。ですが、水俣市内の開業医もあまりそんなものに触れたくない。触れるとやけどをするという気持ちがあるのかと思います。新たに申請用の診断書を書いてくれる医師は少ないのも現実です。だから「水俣病はもうたくさん」となって、水俣病については根本的な解決はなされない。そのために今でも苦しんでいる人たちがたくさんいるわけです。本当に被害の実態というのはわかってないわけでしょ。水俣病患者の総数はおそらく何10万人もいると思う。その結果、一番被害が顕著であった時代に患者になった、ハン

ターラッセル症候群を表した頂点の人たちだけを水俣病と認定してしまっている。それ以外の人たちについては、熊本大学もごく一部を除いてちゃんと研究しなかったし、追跡もしなかった。それが水俣病問題を非常に矮小化してしまったと思う。一部の医師がまともに取り上げてもいわゆる神経学の権威者が認めない事態になった。(その結果世界の水俣病研究からは取り残されています。)僕も研修医のころ、神経内科に所属していました。そのときの教授は黒岩義五郎さん。新潟大学教授の椿忠雄さんたちと同級生かと。黒岩教授と助教授が 後に熊本大学教授となった荒木叔郎(しゅくろう)さん。僕は研修医で、友達と一緒に神経内科を勉強しようかなと研修期間では一番長く神経内科にいて研修していた。あの頃は、こっち側から言うと「大学闘争」、大学側から言わせれば「大学紛争」の時期で、論文事件の時も教授たちと徹夜して、「おかしいじゃないか」と団体交渉をやっていました。黒岩先生から「お前は神経内科に残れ」と言われたことがあり、もし残っていれば僕は相良村に帰って来ずに、水俣病の審査員になっていたかもしれない(笑)。残念でした(笑)。そうするといまごろは左うちわだったかもしれない(笑)。
人の運命は、ちょっとしたことで変わると思うのです。

森山:予定の時間が過ぎましたが、原田先生を訪問するというのは高校生の時に水俣病のことをご存じでより深く知りたくなったとのことですが、水俣のことにもう一歩近づいた理由は何かありますか。

緒方:大学に入っていろいろな問題と関わるようになったことは大きいですね。水俣病というのは大変な問題でもうちょっと勉強しようと思った。相良村に将来は帰るだろうが、もうちょっと勉強したいという思いがありました、父が村長になったものだから、「お前が帰って来んと村の人が困るから帰って来い」と言われた。水俣病は相良村から見れば隣の郡市の出来事なのにちゃんと知らないので原田先生に教えてもらい勉強しようと思った。何せ、近いところに生まれ育ったのに医者として水俣病について知らないと言うのはいかんなということです。本当にちょっとしたことです。父は、権威にちょっと弱いところがあったので、もし大学に残るということになっていればそれは反対しなかったかもしれないですね。

森山:宮崎県側の山が皆伐され山崩れが起きて、県議会に署名を持ち込まれたお話の結

果はどういう風になられたのでしょうか。

緒方：皆伐から択伐方式になったのです。大きい木だけ抜き切りするのです。それからダム反対運動やるうちに今度は川辺川の多目的ダムの水を利用して球磨川の北側・右岸にも川辺川から水を引いて、灌漑する計画を国（農林水産省）が作った。相良だけではなく、多良木まで水を引いていくという計画だった。人吉、山江もちろんそうですけど、「計画では水代はタダだ」と相良の村長が言った。ところが本当は、農家の負担が相当あるわけです。だから、「でたらめ言うな！」ということになり、農家が利水事業反対運動始めた。それは、ダム中止運動に大きな影響を与えているのです。当時の原告団長が、梅山究(ふかし)さんと言う元相良村職員で相良村の教育長までやった人です。梅山さんの意を汲んで板井優弁護士が、一生懸命やってくれ、当事者の農家も頑張りまして止まりましたね。板井優さんの奥様・板井八重子さんは、原田正純先生と胎児性水俣病のことをやった人ですね。

森山：毎年、横浜から来られる常連高校が、板井先生のお話を聞かれています。今年と去年はコロナで対面できず、ＺＯＯＭでやってもらいました。毎回先生は、涙を流しながらお話をされます。

緒方：あのご夫婦も素晴らしい人たちですね。
（このあたりで薪ストーブが消えたため話題変わる）
昔は五右衛門風呂で、中学生ぐらいの時は風呂焚き係でした。鶏をひねるのも僕で、五右衛門風呂の下でひねった鶏の産毛を焼くのですよ。そしてさばくのです（笑）

森山：では、最後の特措法のところをお願いします。

緒方：要するに認定基準の問題ですよね。認定基準を非常に狭くとっているわけでしょ。原田モデルのピラミッドの頂点だけを水俣病と認定しているわけで、原田さんのピラミッドモデルのせめて中間ぐらいまでは認めるべきですよね。それがまったく典型的なハンターラッセルしか認めない感じでしょ。病気というのが、今のコロナを見てもわかりますよね。ひどい人は死ぬけれども、一方では感染しているけど全然症状もない人も

いる。そうかと思えば症状が収まって、症状が治まってウイルスがいなくなっちゃっても後遺症が残っていて悩んでいる人もいっぱいいるわけです。コロナでは検査で陽性であれば症状がなくても隔離されました。水俣病だって全く一緒ですよ。ひどい人がそれはひどい人もいるけど 症状が軽いけれども実生活で困っている人がいっぱいいるということもあるわけで、一律にある程度のレベルでないと認めないというのはでたらめなことですね。水俣病ではコロナ感染とは違って慢性の中枢神経障害の症状で悩んでいる人がたくさんいるのです。あの原爆でもですね、黒い雨にうたれた人は認めてやりましょう。まあ、全部認めているわけじゃないですけど、比較的そういうふうなこともできるわけですよね。だからやろうと思えばできる。全く水俣病に関してはガチッと決めてしまって、一歩も外へ出ないという感じです。特に新潟県や鹿児島県に比べて、熊本県は行政が意固地になっているように感じられます。また、これは医学や医療の問題で、いわゆる権威のある医者、神経学者たちの問題ですよね。この人たちが本当に患者さんに寄り添って患者さんのことを考えてやろうという気持ちが無いっていうことですね。自分の業績だけです。今のダム問題での知事といっしょのような気がします。

森山：メグの話が出てきますね。国水研のデータの偏りというか、認定者しかだしてないって。

緒方：結局そうなのですよ。水俣病の権威者たちは、認定された人たちしか見てない。実際に現地に来て、水俣病の患者さんの話を聞き、地域の状況を見る人はいない。徳臣教授自体が、水俣病の認定された人しか研究対象にしてなかった。最近、高岡滋さんが本を出したでしょ。あれ読んだら面白いですよ。水俣病に関して、いかに医者がでたらめなことをやったか書いています。権威のある医者達なのに。

（省略　5分ほど原発や戦争などについて雑談）

森山：年末の押し迫った時にお話いただいて本当にありがとうございました。

竹中：ありがとうございました。

主　　催	水俣から學ぶティーチャーズネットワーク
共　　催	(社)環不知火プランニング
助　　成	熊本みらい基金
協　　力	食・農・人総合研究所リュウキンカの郷　代表・本田節
聞　き　手	神戸市立小学校 竹中美香子、(社)環不知火プランニング 代表・森山亜矢子
コーディネーター	(社)環不知火プランニング　代表・森山亜矢子

2023年1月7日(土)

＜教育者向けオンライン研修＞

水俣学修で感じさせたいこと

筑紫野市立天拝中学校　稲田泰典 校長

水俣の授業を継続的に取り組まれ、かつ修学旅行先に水俣を選択されている
校長先生にお話いただいた。学校でどのような授業を展開したのかという事例を
「なぜ、子どもたちを水俣に導いたのか?」という想いを含め
伝えていただいたオンライン講演記録。

主　　催　　水俣から學ぶティーチャーズネットワーク
共　　催　　(社) 環不知火プランニング
助　　成　　熊本みらい基金
協　　力　　神戸市立小学校（司会進行：竹中美香子）
コーディネーター　　(社) 環不知火プランニング　代表・森山亜矢子

＜教育者向けオンライン研修＞

水俣学修で感じさせたいこと

筑紫野市立天拝中学校 稲田泰典 校長

2023年1月7日（土）

内容：水俣の授業を継続的に取り組まれ、かつ修学旅行先に水俣を選択されている校長先生にお話いただいた。学校でどのような授業を展開したのかという事例を「なぜ、子どもたちを水俣に導いたのか？」という想いを含め伝えていただいたオンライン講演記録。

司会進行：森山 亜矢子

環不知火プランニング代表、森山亜矢子です。参加者の皆さま、新年早々、パソコンの前に座っていただいてありがとうございます。コロナ禍は決して良い出来事ではありませんでしたが、このように、今まで面識がなく、遠方でなかなか交流する機会がなかった人と接触のチャンスも生まれました。私も含め社会で、このようなスキルがアップしたので、チャンスを広げる一助になっているかと思います。悪いことばかりではないかなという気はしています。

そのチャンスを生かし、本日は福岡県筑紫野市立天拝中学校稲田校長先生に「水俣学習で感じさせたいこと」というテーマで、学校での実践を含めた貴重なお話をしていただきます。稲田さんのお話の後は質問を受け、参加者のみなさんとの意見交換などを行い、終了時間は11時半の予定です。ちなみに昨日時点での参加者構成は、教育関連が60%、教育フォロー団体18%、学生11%、その他11%という比率です。

水俣の出来事から、どういうふうに社会問題、世界の問題と関連付け、そして子どもたち若者たちの活力とするか、悲しみとか苦しみを刷り込み続けるだけではなく、若い人たちの活力とするのが一番大切なことかなというふうに思います。

先生のお話の最中、チャットに質問や感想など書いていただければ幸いです。本日は、貴重な研修の機会なので、記録させていただくことご了承ください。

本来ならば、水俣と筑紫野市を繋ぎオンラインで行うところを稲田校長先生には水俣までお越しいただいております。よろしくお願いします。それから私とともにオンライン研修会を進行してくださる神戸市立だいち小学校の竹中美香子教頭先生も水俣に来ていただいております。では早速、進行を竹中さんにバトンタッチします。よろしくお願いします。

司会進行：竹中美香子

よろしくお願いします。自己紹介いたします。「水俣から學ぶティーチャーズネットワーク」で以前、小学校のワークシートを作成担当させていただきました。私は、普段の授業では、あまりワークシートなどは使いません。子どもたちの色んな意見を引き出しながらその場その場で考えていきたいと思いながら、授業を行っています。ですが、ワークシートは、一つの授業パターンとして、「水俣から学ぶこと」を広めるため作った次第です。また、参加者の方たちのお話をお伺いすることも楽しみにしています。では早速、稲田先生お話の方、よろしくお願いします。

講話：稲田泰典校長

おはようございます。福岡県の筑紫野市立天拝中学校で校長しております、稲田と申します。筑紫野市というのは、福岡市の南部にあるいわゆる周辺都市になりまして、隣には、太宰府市、太宰府天満宮があるところです。

天拝中学校一学年が大体100人ぐらいの福岡都市圏の中では小さな学校になります。

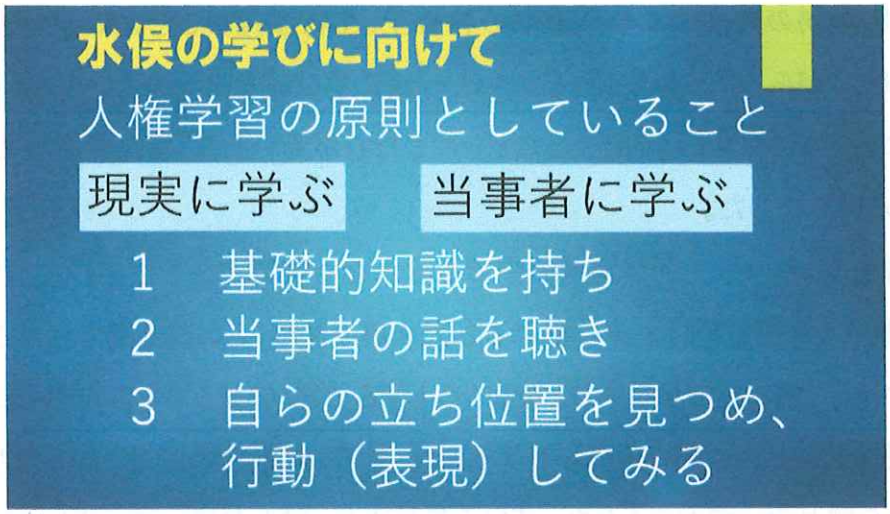
私について、この人誰だろう？と思われている方も多いかと思います。水俣でお話しをしたり、交流会に参加することはなかったので、ご存じの方もいないと思いますので、簡単に自己紹介からさせていただければと思います。

私が、自分の軸としてずっと取り組んできたのが「同和問題」です。福岡県は同和問題について中心的に取り組んでいる地域です。いろんな社会問題を自分で学びながら同和問題を見つめ直していくというようなことをずっとやっています。最初は、加配教員として、いろいろな同和地区の人たちと交流をしてまいりました。それは今でも続いています。その後、研究団体で仕事をするようになり、40代以降は、教育行政の中で「人権教育」や「同和教育」をやっていました。そして、現場に戻り管理職になった今、もちろん、同和問題もやって

いますけども「修学旅行に関しては、水俣で」ということで取り組んでいます。

なぜ修学旅行に水俣を選んだかですが、元々「水俣学」について自分自身も学んでいました。一方で筑紫野市は、近隣の他市は関西に行く学校が多いのですが、修学旅行の保護者負担を少なくするということで、2泊3日で4万2000円以内に収めるということになっていて、ほとんど広島か南九州に行っています。南九州の知覧特攻平和会館が行き先としても非常に多かったです。私自身、知覧もいいのですが、ぜひ水俣に生徒たちと出会わせたいというふうに考えておりました。
その理由は、もちろん平和問題も現在進行中ですが、特に同和問題と共通していく部分として、水俣は今も現在の生活の中でも差別や分断が息づいているということ。現在も進行中で、特にあの緊張が、空気が、包まれている静寂な部分があります。これはもう静かというよりも緊張感がいまだに続いている。そういう地域ですが、一方でご存知のように、大変自然も素晴らしいし、海は、「魚(いお)湧く海」と呼ばれ、昨日はちょっと山の温泉に泊まってきましたが、山も美しい。そして、水俣を愛する人たちがたくさんいて、水俣病から学んで地域づくりをされる方がたくさんいます。それと同時に現在潜んでいる悲しみもたくさんあります。
また一番魅力的なのはその経験を踏まえて、地域づくりや人づくり、もやいづくりというか、きずなづくりをやられている方。森山さんもそうですけどが、突き抜けて魅力満載の人たちがたくさんいる。この人たちと生徒たちが出会うと、どういう変化が起こるんだろうなということをずっと考えていました。語り部さんたちのいろんな角度からのお話は、他の地域の学びよりも大きくて、多角的な学びが得られるというふうに考えています。

さて、水俣の学びに向けて、私はずっと人権学習といいますか、同和教育をやってきましたが、その際に原則としていることは、みなさんもご存知でしょうが、「現実に学ぶ」ということ「当事者に学ぶ」が基本になります。



スタンダードな流れでいくと、ある程度の事前学習的なものとして基礎的な知識を持って、それから当事者の方々の話を聞く。もちろんこれは、現地で聞くということが一番いいのですが、コロナ禍の中で難しいところもあります。こういうオンラインも含めてですね。「当事者の話を聞く」、「聞かなければわからない、当事者のいろんな思いを知る」そして、自らの立ち位置を見つめ、行動してみる、表現してみる作業がスタンダードな流れになると思います。ただ、この自らの立ち位置を見つめるのが、いつも難しいところです。

今の学校は、昨年度から水俣に行くようになりました。校長の1校目も2校目も水俣学習を入れましたので、3校目になります。私は今年で最後（定年）になりますが、去年から入れ始めました。昨年度はここに書いてあるような流れです。事前学習は2コマ担任がやりました。竹中さんおっしゃったティーチャーズネットが作られたワークシート資料を活用していました。

次に森山さんの講話を学校に来ていただき生徒向けの講話をやっていただきました。それから、現地学習と振り返り（事後学習）です。加えてその前の夏季休業中に職員向けの学習も森山さんにやってもらいました。そのときの職員の感想があります。これは竹中さんにご紹介をお願いします。

司会進行：竹中

職員の感想をいくつかいただいています。簡単ではありますが、紹介したいと思います。私は、小学校勤務で、学校と小学校と校種が違ったり、勤める場所も違ったりしても、やはり同じようなことを感じたり、共感するところもたくさんあると思いながら読みました。

■まずこれは、理科の先生ですね。「教科の特性上、生物濃縮のことは知っていたが、知らないことを知りながら、学びながら生徒たちと一緒に学び続けていきたいと思いました。」知識としてはあるが、実地として出会ったときにまた心が動いたり、また学び始めたりするのかなと思ったりしました。

「被害者加害者が近いこと、同じ地域の中でも触れない空気があることを知りました。どんな差別事象もそうですが、「ヘタに触れると大火傷をする」という風潮では学び手は育たないと思います。誰もが知らないことをしようとすること、学ぼうとする姿勢を支える風土づくりの必要性を感じました。」火傷しそうだとか、すごく複雑な問題だと思ったときに触れなくて済むなら触れないでおこうかなっていう気持ちは、誰もが働いていくところだと思います。しかしそれでは、思考停止であって、出会うことによってまた考え始める・・・そんなことを感じたりしました。

■「水俣出身の友人に水俣病のことについて尋ねるような会話をした時に、「それは差別だ、言わないでほしい」というようなことを言われたことがあります。私が何を言ってしまったのかよく覚えていないのがダメなところですが、それ以来、その子と水俣病のことに関して話すことは一度もありませんでした。私自身、回避するようになっていると思います。しかし、無知は罪、思考停止しないで、という言葉に、私が最も良くないことをしているなと思いました。」稲田先生が、先生たちも学んだとおっしゃったんですが、そのときに大人も一緒に学ぶことで考え始めるんだなとあらためて思った次第です。

■次は、音楽の先生です。「水俣の話しを聞く中で、「プラスチック汚染についても同様のことが起こるのでは」と心から危機感を感じています。授業をするにあたっては、できる限りの資料や多くの視点からの意見をまずは自分で学びたいと思います。その上で、子どもたちと共に学ぶ姿勢で、自分が知り得た事実について伝えていきたいと思います。」教師もいろんな世の中のことに精通するのは不可能なことで、子どもたちと一緒に出会って、子どもたち一緒に考えていく、これも大切な授業の仕方で根本にあるところかなと思って読みました。

■今は教壇に立たれていない先生です。「自分は今まで社会科の授業の中では、事実と問題点を整理し、これからの未来について考えさせてきたつもりでしたが、今日のお話を聞いて、「自分ごと」としてどう考えさせたらいいのかをしっかり考えて授業しないといけないと思いました。」

「自分ごと」として考えたときに、自分がどこの立場になって考えるかは難しいところでそれ

によって考え方も全然変わってくる。本当にそれでいいのか、悩み出す事実の問題点を整理したら、スッキリしたらそれ以上は考えないのですが、自分だったらどうするかなとか、自分がここにいたらと考え出したとき「もやっ」として。また考え出すそれもとても大切なことだなと。問い続けることの大切さをあらためて考えたりしました。

■「水俣のことについて、水俣の人たちについて過去に起きたこと、今起きている問題や課題を知ることができました。ただ、今日の話をきっかけに知ることがもっとたくさんあるのだということを感じました。様々な人の立場から水俣のことを知りたいと思いました。映像を見たときに自分ごととして考えることの大切さを感じました。小さな子が苦しむ姿も母が苦しむ姿も心に刺さりました。この出来事の何がいけなかったのか、何が起きているのかを考えて、答えではなくても、いくつも答えが出てきても、思考を止めずに人の心に寄り添う考えを持ちたいと思いました。」

思考を止めずに人の心に寄り添う、人の心は見えないので、そこで想像力が働くのかなと思います。その想像力を働かせながら、自分ごととして考えながら、子どもたちも一緒に考えながら、授業を作っていく。

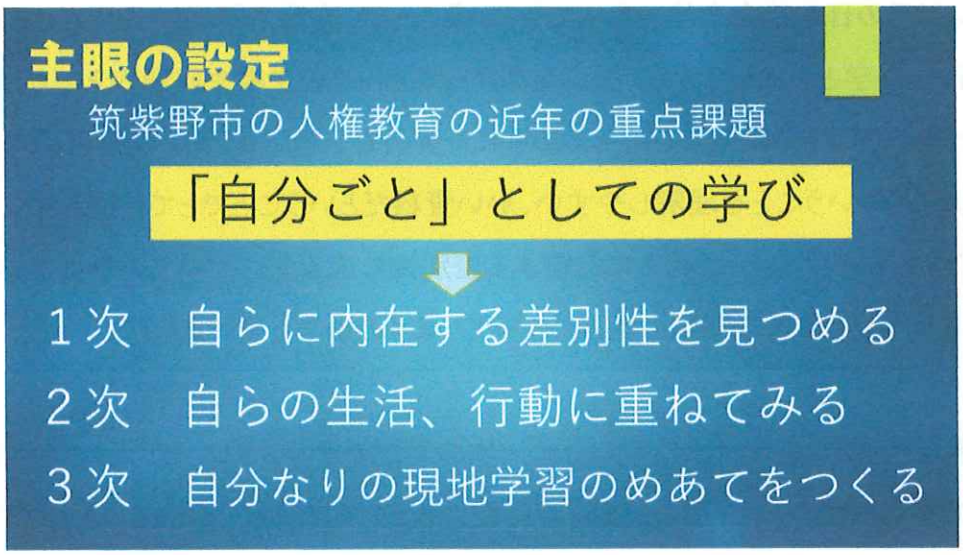
■最後にご紹介する感想です。「私自身、水俣についての授業をするのは、今回が初めてです。なので、単に知識のみの押し付けの授業になるのではないかと不安に思っています。患者さんの苦しみを「他人ごと」ではなく自分のこととして伝えるにはどのようにしたらいいかを考えてしまいます。しかし、今回修学旅行で実際に水俣を訪問することで、少しでも子どもたちが患者さんの気持ちや苦しみを感じとれるきっかけになるのではと思っています。」出会うことによってまた学び始める、自分のこととして伝えるというか共に考える学習になっていくのだろう・・・なっていったんだろう・・・と思いながら、この感想を読みました。簡単ではありますが、以上で感想の方のご紹介を終えたいと思います。では、稲田先生引き続きよろしくお願いします。

講話：稲田校長

ありがとうございました。前半、子どもたちにこんなことを感じさせたいという最初の部分を少しお話しました。今の学校では昨年から取り組み始めましたが、実際には教員自身も水俣のことについてほとんど知識がない、あるいは考えたこともないというところからのスタートです。最初に職員研修として森山さんに来ていただき、そのあと生徒たち対象で2回も筑紫野市に来ていただきました。先生たちとそれから生徒たち、この2回の話は共通のも

のを聞いたということで、先生たちと生徒たちが一緒になって水俣に向けてのスタートができたのではないかと思います。
一方で私自身は若い先生が本当に増えたので、人権問題というものに教師としてどう向き合っていくのかを少しでも伝えたいという思いでこの取り組みをしました。ただ昨年度は取組の1年目でしたので、本当に基礎的なところだけを先生たちにお願いしました。現地学習のあり方です。語り手さんやフィールドパートナーさんと、できるだけ距離を近づけるということを本当に大事にしてほしいと。語り部さんとか、水俣の人とか、患者さんとか、支援者の人という抽象的なとらえ方ではなくて、〇〇さんとなるように子どもたちに意識付けをして、現地でも話をして、さらに先生たちも「語り部さんじゃなくて〇〇さん」というようにその人のことをよく学習していきましょう、と。そのために語り部さんが決まったときには、私の方でそれぞれの方がどういう取り組みをされる方なのか紹介をしました。こんな感じで大体みなさんもやられると思います。できるだけ距離を近づけるようなことを行いました。
さて、ここからが今日の主題になります。今年度は、去年の9月に修学旅行をさせていただきました。今回は、森山さんをお呼びすることをせずに、流れを少し変えてみました。というのは、私は今年度で定年退職するので、自分で授業してみようという気持ちになったからです。それで事前学習を担任から取り上げまして(笑)、3クラスしかないんですけども3クラスの3コマずつの授業を私がやったのが今回紹介する中身です。それから映画「MINAMATA」が公開されてDVDになりました。学校でも当然買っていますので、そのあとに映画視聴をして、現地学習へという流れをつくりました。

先ほどから何度も教員の話で出てきましたが、「自分ごととしての学び」が筑紫野市の人権教育で近年の課題になっています。これはどんな人権問題にしてもそうです。筑紫野市は「同和問題」を中心に取り組んでいます。「自分として自分の中にそれがどう重なっていくのか」にどう切り込んでいくかということが重要です。



私が作った授業について紹介します。本日は先生の参加が60%で、教育者向けということなので授業を創るときの留意点にも踏み込みます。(注:教科・領域の特質、思考の連続性などのことです)「人権学習」は教員の思いが、強すぎれば強いほどたくさんの主題を一つの授業の中に盛り込みたくなります。これも押さえておきたい、これも伝えたい、これもやりたい、これも出会わせたい、こんなことも理解させたい。そして、「どうだ!」というふうに子どもたちに提示をして、1時間ほとんど先生が熱っぽく語り、そして終わった!という自己満足感で、生徒たちがそれに対して非常にありがたい感想を述べて、成果があったというふうになりがちなところがあります。特にうちの学校の若い先生たちはそんな落とし穴を知らない。この前ハンセン病の授業をしてもらったら、やはり知らないとこから始まって、教材研究をして新たに出会ったり気づいたりしたことは、何としても生徒に伝えたいという思いがたくさん出てきます。熱っぽくなって、生徒も集中して参加していた、伝えられたという達成感もあって、「やったぞ!」というふうになるのですが、実は学びとして焦点化されていないところがあります。本当に人権学習っていうのは1時間で1個のことを何か考えるということに、なかなか思いが強ければ強いほどなりにくい、ということを私はいままでずっと考えていました。そういう中で今回は三コマのそれぞれの授業の中に、一次は「自らに内在する差別性を見つめる」、二次は「自らの生活や行動に重ねてみる」、そして三次は「自分なりの現地学習のめあてをつくる」という、それぞれの主題とさせていただいたところです。

まず一次は、道徳の授業として作りました。「自己に内在する差別性を見つめる」。昨年度担任たちが使ったのは、先ほど言ったティーチャーズネットの資料です。ワークシートなど見ますと、原因企業と被害者という単純な図式だけではなくて、例えば市民の中であった

り、あるいはその日本社会全体であったりということで、立場や課題が表現されていて、水俣の学習、水俣学といいますか、いろんな切り口がありその立場や課題がとても構造的に理解しやすい、そういうねらいを持って作られた資料だと思いました。客観的に水俣の問題って何だろうということを理解しやすい、いい資料だということでとても優れていると思います。ただ、私が設定した「自らに内在する差別性に迫る」というところでは、この資料を使ってしまうと俯瞰的な問題の見方になってしまうのかなと思いました。

そこで、学習課題を1点だけに絞りました。一次の学びのポイントは、「工場はなぜ排水することを止めなかったのか」です。水俣病資料館にそういうコーナーがあることはご存知と思います。相思社などでもそういった資料があり、いろいろな裁判の記録の中でも、多様な言い分が出てきます。

一時間目にやったのは子どもたちにこの一点だけ。「なぜ止めることができなかったのか」。チッソの経営陣の1人だったとして考えてみようと。冒頭で私が、チッソの経営者としての意見をロールプレイで演じました。映画「MINAMATA」で國村さんがやっていたように演技がかり、喋ったところもあります。それについて感じたことを五つに分類しました。子どもたちは「なぜ？」と聞かれてもなかなか自分で意見を導けないので、この五つの中身で自分も「うん、そうだ」、「なるほど」と思えたものをチェック入れさせました。自分が何となく納得してしまった意見に気づくということです。

一つは「いまさらすごい利益が捨てられない」、二つは「当時違反はない」「止めなさいとも言われていない」「排水処理の技術は業界のトップクラス」　それから三つ目は「多くの従業員、企業、そして市民、水俣の市民の人の生活を保障できなくなる」当時のチッソを守る運動があった背景のことですね。それから「排水が原因ではないという専門家もいるし別の専門家は海に放出すれば害はないと言っている」これは国レベルでは、よく出てきた話です。最後は根本的な問題ですけども「高度成長が止まらないように作り続けることが我々の使命だ」という意見。複数回答で、私が本当に子どもたちを会社側の立場で説得してみました。
子どもたちは子どもたちで、これらが排水を止めなかった理由だとわかっているので、なかなか説得されないわけです。つい納得してしまって説得をされてしまった人たちはAが

55%、Bは24%、Cは48%、Dは26%、Eが32%でした。私なりにだいぶ説得したつもりでしたが、このぐらいしか説得することができませんでした。ですが説得された子どもたちは、ここで自分の中にモヤモヤが始まるのです。このモヤモヤこそを仕掛けました。よくある人権学習では勧善懲悪の世界で、良い悪いがあって、悪いものをどんどんどんどん攻めるのです。ここでは、実は説得された自分がいたということをまず経験させます。

そのあと一次のまとめとして、社会全体の発展あるいは市民の方々、そういう発展のために一部の人の命が犠牲になることは仕方なかったのだろうか、当時の社会情勢としても仕方なかったのかということを問いました。そうすると、「仕方なかった」21%、「迷っている、わからない」23%、「仕方なかったということでは済まない」というのが56%です。ここが一番ポイントで、人権学習ではよく経験の浅い先生たちが、「仕方なかったでは済まない」という感想が出ることを求めています。これが成果だというふうに思いがちです。生徒たちはわかってくれたのだと。だけど私が言った「自分ごと」として考えるというねらいでは、この「仕方なかったでは済まない」という56%は、これは失敗の56%だと思っています。「仕方なかったとか迷っている44%」こそ、私が狙っていた答えなんですね。「仕方なかったでは済まない」というのは、簡単に出やすいんですが、やはり思考停止なんです。常識的な答えなのです。

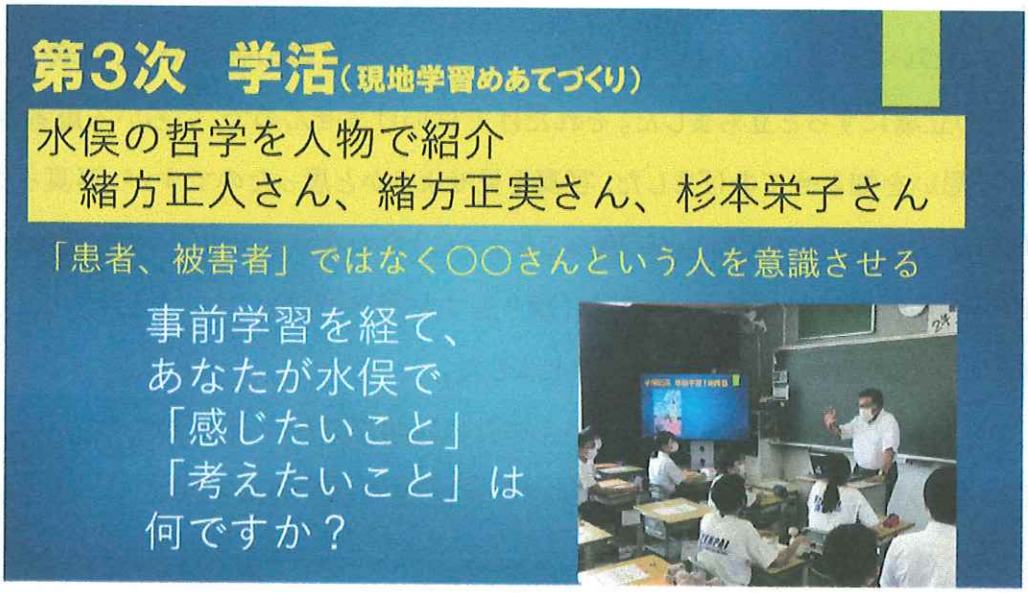
これを引きつづいて二次は、学活として構成しました。自分意識の強化です。前次では、私はチッソ側の立場にずっと立ちました。それだけではいけませんので、いろいろ患者さんたちの様子や思いを知らせてあげました。写真を見せようかと思ったのですが、写真って本当に一瞬の切り取りなので気持ちが(染みこむように)なかなか伝わりにくいと思ったので、手記の朗読を中心にしました。同時に「繰り返す人間への諦め」というのもありましたから、水俣が今取り組んでいることも紹介しました。

そして、水俣で迎えてくれる人たち、みなさんのために語り部さん、それからフィールドパートナーさん。語り部さんという言い方はしないで、○○さん○○さんと私は、ずっと言いました。フィールドパートナーさんの名前も言いました。その人たちは「あなたたちにどんな人になってほしいと願って、みなさんを待っていると思いますか?」という問いです。水俣の願いを子ども自身の日常生活に向けてみました。

ここで先ほどの一次のところで「仕方なかったでは済まない」という非常に常識的な回答した生徒の答えを分析しました。すると、「本当のことを知ってほしい」とか、「真剣に前向きに向き合ってほしい」とか、「繰り返して欲しくない」というありきたりの感想が出てきま

す。一方で「仕方なかった、あるいは迷っている」という生徒は、他人ごととは捉えないとか、「つらいときに寄り添える人」とか、「相手の気持ちを考える」「自分が聞いた情報だけで差別しない」などが感想として出てきました。原因企業に立った私の主張を聞いて「迷ってしまった」「仕方ないと思ってしまった」自分を意識して、ちょっとだけですね、自分ごととして捉えるプロセスというのが、子どもたちの中に見えたと思います。
もう一回いいますね、「本当のことを知ってほしい」とか、「人のつらさがわかる人」とかは、やはりあまり深みがないのです。なんとなく「他人ごと」なんですね。ところが「迷った」というプロセスを経た生徒については、自分自身の弱さとか醜さとかいう部分を感じていると思います。

さて最後の三次は現地学習のめあて作りです。総合として組み立てました。水俣の哲学ということを人物で紹介しました。緒方正人さん、緒方正実さん、杉本栄子さんです。「チッソは私であった」などはなかなか難しい話でしたが、「事前学習を経てあなたが水俣で感じたいこと、考えたいことは何ですか」と個別にめあてをつくらせました。共通のめあてをつくるのはやめました。自分で感じたいことをつくるということです。

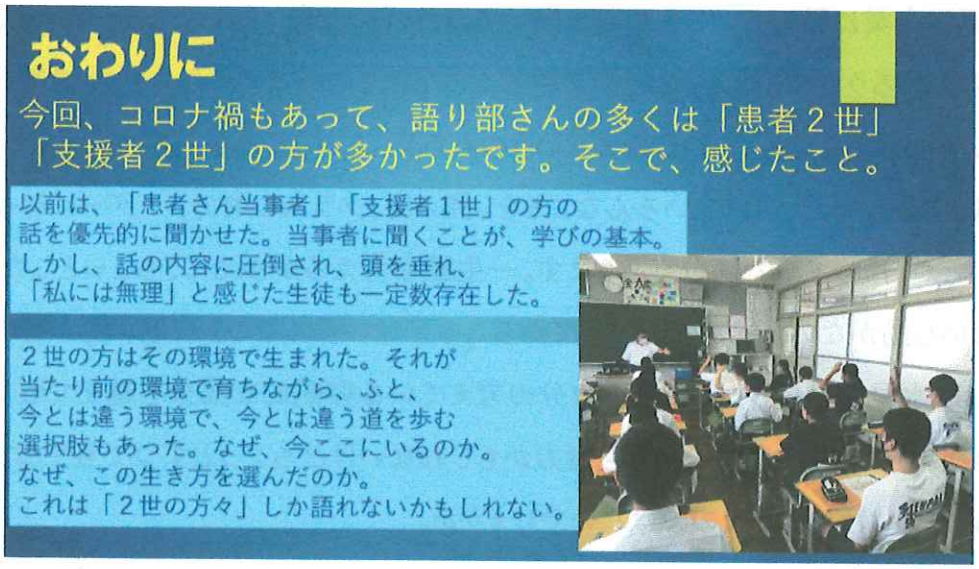


一人、気になった生徒がいます。この子は、「仕方なかった」の代表的な子です。一次では「利益の関係で止めたくなかったので、別の専門家に金を積むなどして否定的な意見を導いたかもしれない。これが一番の問題」　二次では「内戦や紛争も社会を変えるためにやっている」と書いていました。「兵士の犠牲は、国を変えるために必要だと思っている人

がいます。争いが絶えない中で今後も仕方のない犠牲は出てくるものだというふうに考えています」と記しています。また同じ二次で「みんなに同じように触れていきたいが、意識しすぎたり、丁寧に扱いすぎたりすると、むしろ他の人との格差が生まれてしまう、そうはしたくないんだ。」　最後の3次では「自分のめあてですけど、知り合いや家族が病になっていく中、原因企業に勤めている人の話を聞いてみたい。」と書いていました。やはり、なんでだろう、なんだろうと考えながら、社会の中にこの子はこの子なりに今の社会情勢というのを自分の中で感じている。しかし諦めというのもある、ということかと思います。
この子は、水俣で学びました。いろんなことを。例えば、クラスの中でリーダーになっても意味がないとか、冷めていた部分もあります。一生懸命考えるがゆえに、ちょっとしたことでは動じないし動かない。ただ、帰ってきてからこの子はいろんなことに取り組み始めました。それは、水俣で出会った人たちが自分の考えている客観的な部分を越えて取り組みを進めてきたという部分に触れ、自分も無力かもしれないけどちょっとずつでもやってみることはあるというふうに思ったのではないでしょうか。

今回の修学旅行では、コロナ禍もありましたので、語り部さんの多くは患者2世の方とか、支援者の2世の方々との出会いでした。
患者さんも高齢ですし、基礎疾患もあるので、なかなか中学生の前に出られる時期ではありませんでした。実は私はですね、今年そういうふうになる前は患者さんと触れ合わせたいな、という思いが結構強くあったのです。胎児性の方とか、しのぶさんとか金子さんとかに、以前は触れ合わせていただいてきました。当事者の方あるいはその支援者一世の方、そういう方の話を優先的に聞かせました。当事者に聞くことが学びの基本と思っているからです。そのときの生徒は本当に貴重な体験をしたのですが、話の内容に圧倒されてしまって、ただ頭を垂れていたのが気になりました。そして「私には無理」と。無理と感じる自分も嫌だけど、その生き方は私には本当に難しいというような生徒が一定数ですが存在しました。それほど当事者の方の話には圧倒的な力があります。子どもたちが、体験を生活に繋げるという意味では、相当なフォローが必要になってしまうのです。
その方々が話した壮絶な体験以外に、もっともっとヒューマニズムみたいな、あるいは人間性、そしてその人なりの弱さみたいな部分も触れさせていかないと子どもたちは本当にただ頭を垂れるだけになってしまったケースがありました。これは私たちの事前学習や事後学習のミスだと思っています。

今年は先ほど話したように、はからずも2世の方々が多かったのです。その方々は生まれたときから水俣病の問題と過ごしてきた方々で、そこで当たり前のように育ってきました。しかし、今とは違う環境で違う道を歩むというチャンスもその方たちにはありました。実際に水俣を離れた方もいらっしゃいます。一方でまた戻ってこられる方もいます。



なぜ今ここにいるのか、なぜこの生き方を選んだのか、与えられた業ではなくて自分からこの生き方を選んだというところは、もしかしたら2世の方々しか語れないのかもしれない。そうするとそういう方々の選んだ道というのも、生徒たちにとっては一つの道標になるのかなとも思います。今年の修学旅行で初めて感じました。またこういうことも含めて、2世の方でしかできない学びという部分もつくっていければいいんじゃないかなというふうに思いました。ちょっと話が長くなりました、終わりたいと思います。ありがとうございました。

司会進行：竹中

ありがとうございました。小学校、中学校とか校種を超えていろいろ本当に勉強になるというかすごく印象的な話がいっぱいあるなと思いました。参加者は、チャット質問や感想をお書きください。

稲田先生なりの切り口の授業運びをされたのだろうなと。今年度と昨年度で流れが違いますよね。この流れが違うっていうのは、その子どもたちと何を考えるのかという視点が変わったり、そういうことがあったのでしょうか。

稲田校長

一番違うのは、私が授業したかったというのがスタートです。ただその前年度、先ほど竹中さんから感想を紹介していただいたように「自分ごととして捉える授業はどうしたらいいんだろう」と先生たちが悩んでいたので、それに自分なりにちょっとでも参考になればということを自分でつくってみようと。先生たちは本当に忙しいので、そこを一から考えるというのは厳しい。本当はさせた方がいいんですけども、できなかったので、私がこんなふうに考えてみたらどうかというのを、この授業の中で示したような形です。

司会進行：竹中
はい。ということで去年も今年もやっぱり一番大切にしたいところは自分ごととして考える授業。そのための切り口が、去年はご紹介いただいたみたいにティーチャーズネットの資料を使って、森山さんの話を聞いて。今年はとうとう先生が授業されて、見つけて突きつけて自分はどう思うかっていう意見を出させてっていう切り口が変わったり。
切り口を変えたことで、子どもたちの様子とかって、手応えが違いましたか。

稲田校長
そうですね、やっぱり自分自身が、これ表題とリンクしますが、感じさせたいことは自分の中でどれだけモヤモヤしているか。モヤモヤを感じるということ。去年は事前学習ですっきり整理して、先生たちはしっかりまとめて、すっきりさせることが授業だと思いがちなので、ある程度すっきり整理させて現地に行ったんだけど、今年の場合は自分自身の中にある差別性に気づいて、本当に世の中に対してどう考えたらいいのかというモヤモヤ感、これを感じさせたいというのがテーマでした。

司会進行：竹中
神戸の小学校の先生たちが、水俣に来て一緒にいろんなものを見るんです。感想の中でよく聞くんですが、「これの中の何をどう伝えるのか、どう授業をするのか、ものすごくモヤモヤしています」「すごく悩んでいます」「僕は授業できるかな」とか「どうやって授業したらいいかな」などなど思い出します。
「モヤモヤしてる」って悪い言葉みたいだけど、考えている証拠かなと思っています。

私は小学校、稲田先生は中学校で、参加者の方には、高校や大学でも授業されているとい

うことなので、水俣のことに関して授業をされている方から感想、ご意見なり、お気づきなど自由な角度からで構いませんので、こちらから指名させていただければと思いますのでよろしくお願いします。
突然ですが、N大学のTさん、感想なりご意見をお伺いしてよろしいでしょうか。

N大学：T准教授
本当にお話ありがとうございます。今日お話をうかがって、「仕方がなかったでは済まされない」という感想が、実は他人ごとであるというご指摘に今まで私自身がモヤモヤしてきたことにすごく大きな輪郭を何か与えられたような気がして、心の底から本当にそうだなと思いました。大学で私は、「チッソ水俣工場技術者たちの告白」という映像を、まず90分～60分必ず見せて、なぜ止められなかった、仕方がなかったというふうに告白をしていく、あるいはその映像の中で、排水を止めなかった判断は間違ってなかったというふうにおっしゃる技術者の方の証言なんかに必ず触れますが、それを経てそれに対して技術者の人たちを外側から捌く感想があったり、あるいは今日ご紹介があったように、仕方がなかったでは済まされない、どうしたらいいんだろうかという形である意味、思考停止をするような感想があるのが事実ですね。何かそれをどう次に繋げていけばいいのかなと思いながらいつも1年間の授業を終えるというような形だったので、それを仕方がなかったじゃ済まされない、なんかそこが一番自分自身の今日は、次へのヒントとしていただいたなという感想を持っています。ありがとうございます。

司会進行：竹中
ありがとうございます。仕方がなかった、迷っている、わからない、仕方がなかったでは済まない。もう1回そこで出会わせて揺り返す。学ぶことの消化困難さを越え、中学生はすごく勉強になったのだろうと想像します。
次に高校で授業されているO先生よろしいですか。

K高等学校：O先生
森山さんの環不知火プランニングでずっとお世話になっている私立女子中高の教員のOと申します。初めまして。よろしくお願いします。今日お話伺ってまず新しく取り組み始めた学校が、増えていること自体がすごく嬉しいなと思って、どういうふうな取り組みをしているの

かなと興味があって参加させていただきました。ひとつ伺いたいなって思ったのが、水俣に行こうと先生がやられたきっかけとして「同和教育」から入っていって、「人権教育」の取り組みがあって、生徒に自分ごとにさせたいと、この水俣の問題と出会う中で感じたという経緯を伺いました。社会の問題とかこれまでこの日本の社会が体験してきたことを「自分ごと」として生徒に受け止めてもらいたいっていうのは、私も同じことを感じています。横浜の私立の中高だからということもありますが、そこをくぐって、同和教育からアプローチをするっていう体験してないのです。ハンセン病のこともおっしゃられていたんですけれども、人権の問題としてなぜ水俣に注目をするんだろうかとか、同和の問題を通じて、あるいは同和問題から現在、生徒に考えさせたいなと思うときに水俣に着目される理由とか、ちょっとその自分がわからないからなんですけども、人権教育の中からなぜ水俣の方にアプローチされるのかっていうのを質問させてください。そして、取り組みされている中身はすごい。例えば最後の2世の話とか、歴史的な出来事に水俣病のことも含まれると思うのですけれども、これからの生徒たちにどう問題関心を持ってもらいたいか、自分ごとにしてもらいたいか、とても共感できるので、いろいろな知恵をいただいたと思います。今後も交流させていただけたらと思います。ありがとうございます。

司会進行：竹中
ありがとうございます。稲田先生、今のご質問に関して。

稲田校長
福岡は、同和問題に対しての取り組みというのが非常に中心的な地域ではあります。それは福岡県が、同和問題だけではなくて、福岡県特有というかですね、炭鉱の問題とかそういうことも全てリンクした福岡が抱える複合的な課題があります。
その中で一番感じているのは、「私はもう差別をしない、あるいは部落差別してはいけない」と市民調査とか県民調査の結果で回答があり、そういう方々が非常に多い中で、結婚の問題や就職の問題になって身内に関することとなると「そこはちょっと考える」という社会の中にある差別に対して自分もそこに寄り添ってしまう傾向の人が、一定数、かなりの割合で多い。だから差別は許されない、部落差別は許されないということはとても皆さんよくわかっているが、自分の身に降りかかったときに、自分の身内がどうなると「そこはちょっと待てよ」と。この問題が先ほど言った「仕方ないでは済まない」というその表面的な課題

と、それから自分の中にあるモヤモヤとした部分と一緒かなというように思っています。
修学旅行は冒頭申しましたように予算的な部分がありますので、広島か南九州しか行けないというか、そこの中で何かを探さなければいけないのです。筑紫野市ではずっと知覧特攻平和会館に行ってましたが、水俣には現在も市民の方々の中に例えば病名を変えようとか、あるいはそのチッソそのものをどう捉えるのかという部分の、本音と建前が非常に複合的に残っている地域だというふうに思っています。それに向き合った中で、本当の意味で地域づくりを進めていこうと、無農薬を進めていこうという地域ですので、子どもたちにとってそれぞれに様々な切り口が出やすい場所かなと。修学旅行4万2000円の範囲の中では、子どもたちの中に一番いろんな学びができる場所かなというふうに感じています。それと元々自分が係わっている地域の中で水俣に熱心な方がいらっしゃって、その方々と交流していく中で自分もぜひ取り組んでみたいと思ったのがきっっかけでした。

K高等学校：O先生
ありがとうございます。

司会進行：竹中
本当に水俣のことを学ぶ。水俣について詳しく学ぶというより、水俣を通して、いろんなことを考えたりする取り組みなんだなっていうのをあらためて思いました。
質問にSさんから1回の学習時間はどれぐらいですかと質問がありました。多分小学校45分、中学校50分だとは思うんですけれども、その時間数がどれぐらいかけてされてますか。

稲田校長
1時間50分で3コマですね。ほかにMINAMATAの映画見るのに2コマ。その後に現地学習となって、学校で事後学習を行います。

司会進行：竹中
多くの時間をかけてやる良さもあれば、コンパクトにシュッと、することを焦点化して学習目標をきちんと持って取り組んでいくことの大切さもあるかなと思ったりします。先ほど質問していただいたSさんは、平和学習で神戸に来ていただいて、1回お話を伺ったこともあります。水俣と長崎の平和学習で、扱っている題材は違うのですが、こんなことをこんなふうに

伝えてますなど、ご感想ご意見含めてSさんにお伺いしてもよろしいでしょうか?

P(団体):Sさん

こんにちは初めまして長崎で平和学習をしているSと申します。私は、原爆とか戦争のことを語っているので、水俣のことを平和学習と置き換えながら聞いていました。一番興味深かったのは今の子どもたちが体験者の話が重すぎて、かえって2世の方の体験が自分のこととして何か考えを深めていけることができるっていうのが、今の世代なんだろうなと、とても学びがありました。

長崎も水俣も福島に関してもその被害者と加害者っていう二つの立場があって、双方の立場からの考えっていうのを詰めていくことだと思うんですが、長崎の場合はその原爆を落とした科学者の立場について考えようということを中学校ではしてますが、それをするためには事前にきちんとした学習をしないと子どもたちの考えって出てこないんですが、なかなか中学校の先生がそこまでの学習をするスキルがないと感じています。

私達自身の講座で、1時間をかけてアメリカの立場や考え方を伝えて、その後に学習に入ってもらいますが、水俣に関しても基本的な知識をきちんと子どもたちに伝えた上での学習になってくるとは思います。その学習スタイルっていうのはどういうことをまとめ、1時間1つというの目的もあったり、あと五つの設問を持って子どもたちに意見を書かせるっていうことで時間短縮はされるとは思うんですけれども、それでも3時間ぐらいで学習を収めるっていうことはすごいと思いながら聞いてました。

司会進行:竹中

ありがとうございます。稲田先生、Sさんのお話を聞かれて、思われたことなどありましたら。

稲田校長

私の平和問題の学びは、長崎です。原爆だけではなく宗教(キリシタン)の問題とか、同和問題とかが絡んでいる長崎というのが非常に勉強になると思っています。うちの地域は、小学校が長崎にお邪魔します。でも小学校もちゃんと学習して行けよと思ってるのです(笑)。せっかくの素材ですから。小学校の先生方にもいろんな方々を紹介しないと、資料館に行って終わりという修学旅行を組んでる学校はたくさんありますので、その時には力を貸し

ていただければと思います。よろしくお願いします。

P(団体):Sさん
ぜひよろしくお願いします。ありがとうございました。

司会進行:竹中
ありがとうございます。小学校の話も出ましたが、小学校では水俣のことは、社会で取り扱いますが、必ずやらなければいけないものではなく、公害の中で一つ選んで授業する。あとは総合的な学習でやる学校、やらない学校もある。小学校でどこまで出会っているのか。その上で、中学校では何を学ぶのか。小学校と中学校の連携もできたらものすごくいいだろうなと。小学校で全く扱ってない子どもたちが、中学校でゼロから学び始めるのと、小学校である程度学習した後ならば、中学校でもっとできる。スタートを簡単にできるかなとか、その辺も考えました。そもそも考えることが大事かもしれません。
来年水俣に来る予定の、N中学校のY先生よろしいですか。

N中学校:Y先生
おはようございます。N中学校のYです。今日はありがとうございました。実は、今年からうちの学校は、水俣へ行く予定です。実は2年ほど前に昨年行く予定をしていたのですが、コロナの関係で行けなくなってしまいました。これまで私どもの学校は沖縄に行っていたのですが、陸続きで行けるところという制約があり、じゃあ水俣ということになりました。自分自身、学年主任をさせてもらっていて、いろいろと学年の打ち合わせとかをしてる中で、昨年末には森山さんに、うちの学校の先生に対して講習をしてもらいました。
うちの学区は、ESDとかSDGsに着目してやっているため、どうしても環境都市としての水俣という側面が先生にとっては入りやすい事情があります。それでいながら、私自身は、いろいろ去年勉強させてもらう中で、「いやそうじゃない、明るい未来みたいなところだけではない部分」を知ることが、寄り添うことに繋がると思っています。そういう悩みも含めて、現地でどういう学びができるのか教えていただければと思います。お願いいたします。

司会進行:森山
稲田先生。天拝中の事例みたいな、こういうことやったっていうのは、今回話していただい

ていないので、そこも話してもらってもよろしいでしょうか。

稲田校長

私は、天拝中だけではなく、前任校も前々任校もずっと水俣にお世話になっています。その中で大事にしているのは、語り部さんたちと語らう場面です。当初は、クラスを3分割して10人ずつぐらいで1人の語り部さんに話していただきました。自分が感じたことをずっとホワイトボードに書きながらですね、それをまた出し合いながら交流すると。実際に家にお邪魔したりもして家でお話を聞いたりしていました。家以外のところももちろんあるのですが、コロナ禍では、語り部さんの人数が揃わなくなってきたため、今年は1クラスに2人という形でお話ししていただいています。

環境学習も水俣では水俣病を踏まえて、環境都市宣言をされている。今の水俣市は、きれいな海などを強調されています。今年は2世の方々が多かったのですが、やはり1世の方々、当事者の方々も含め、車座になって時間を過ごす。そんなやり取りをすることが、現地学習でしかできないと思います。オンラインでは距離感がどうしても出ますが、車座でやることを水俣の現地学習ではこだわりました。

N中学校：K先生

今日は、いろいろなお話聞かせてもらってありがとうございました。去年の10月に来年修学旅行に行くということで下見に行かせていただいて、そこで森山さんから少しずつお話伺いながら私自身もそのときに水俣病のことについてちょっとずつ勉強し始めたところです。昨年12月、2学期の最後の12月のときに第1回目として、水俣病をとりあえず知るために、30分ほどのビデオを見て、事前学習の第1回目を取り組んだところです。私の個人的な悩みというか考えていることは、今後どういうふうに展開していったらいいのかを考えていたので参加しました。稲田先生から取り組みをスライドで見せてもらい、すごくありがたかったと思います。事後の振り返りの学びは、1人の例として、帰ってきてから、自分ができることを少しでもやってみようと取り組みはじめた生徒がいたお話をされたと思いますが、具体的に取り組んだことを教えていただけたらありがたいなと思ってます。よろしいでしょうか？

稲田校長

何かの取組のあとは振り返りの作文を書くケースがとても多いのですが、うちの学校は取

り組みをしたあとには、短歌風に五七五七七で自分の思いをそこに詰め込むということをよくやります。今回の学習もそうでした。それはもう国語科がいつもやってくれるのですが、言葉を選ばないといけないし、自分がこう感じたこと、本質的なことを自分の中で整理しないといけないし、学んだことが何なのかというのを自分の中で焦点化していく作業が必要になります。作文を書くとなんとなく埋めようと思っていろんなことが拡散するんですけども、五七五七七の中に自分の学びを全部表現しようという作業は、子どもたちの振り返りの中では非常にいい作業と思います。全員の短歌をそれぞれの教室や廊下に貼って、みんなで振り返ってみたり、自分の思いみたいなのを授業の中で「だからこういうふうな短歌を作りましたよ」というようなことをやりました。

N中学校：K先生
ありがとうございます。

司会進行：竹中
K先生ありがとうございます。ミーティングチャットの方に「一世の方の話が重すぎるという部分をもう少し具体的にして、生徒さんたちの様子を教えていただきたい」とありますがいかがでしょうか。

稲田校長
一世の方々、患者さんや支援をなされた方、当事者の話っていうのは、聞かれたことたくさんあると思います。私もたくさんの方にお話を聞かしていただいたことがあります。その方々も自分の方の経験とか、あるいはそのときの思いを述べられます。それを受け止めるには、背景とか、置かれた事実であるとか、その方の人生とか、その面だけではない、多様なその方の姿、もちろん弱いところもあるし、面白いところもあるし、いつも泣いてばっかりいる、悲しみばかりで生活しているわけではない、そういうものも全て丸ごと子どもたちに伝えないといけない、というふうに思います。ただ、子どもたち側にそれだけの力の備えというか、教員側の準備というか、できていなかったということがあるので、結局、悲しみとか怒りとかそういう部分がクローズアップされてしまって、子どもたちがいきなり選択の余地なく背負わされてしまう。そこから芽生えていった人間らしさみたいなところまで行き着かず、子どもたちが帰ってしまうというところが私自身の今までの反省です。ですから、一世の方々の話が

重すぎるというより、大変な経験をされているからこそ子どもたちにわかりやすくこちらが準備して進めないといけない。
もう一つは「重すぎる」のが問題ではなくて、二世の方々が人生の選択肢の中で水俣を選んだということは、大事なことだろうなというふうに思ったところです。以上です。

司会進行：竹中
ありがとうございます。どの方のどんな話を聞くのかによって、学習全体が変わってくること、組み立てを変えなければいけないところがあり、心に響くところもあるかと思います。大学生が聞くのか、中学生が聞くのか、小学生が聞くのかによってもまた、受け止め方なり、聞き方が変わるのかなと思います。終了の時間が近づいてきました。

司会進行：森山
T大学のKさん、入ることできますか？そちらの大学でどういうふうに進められてますか。調査などのお話は聞いたことありますが、感想を含めてお話いただくとありがたいです。

T大学：K教授
ありがとうございます。すいません。ご無沙汰しております。元Y大学のKと申します。K大学に移って、5年半目ぐらいになっております。環境社会学という授業の方で水俣は、少し扱っていますが、確かに今日のお話にあったように、なかなかその先まで伝えるっていうことはできてないというのは日々感じております。授業の内容としましては、基本的にその環境社会学Ⅰというのは教員養成型の大学ですので、基本的には小学校から高校までの教員になりたい学生が必須です。ここぞとばかりに4大公害を整理しますという結構きっちり教えるという形の授業になっております。
そういった教員養成型ですので、他の授業の割と水俣の他の先生方、例えば環境法ですとか、あるいは環境倫理ですとか、またあるいは、社会科教育の方で取り上げてくださっているので、私自身としては、水俣3割ぐらいで、あとはイタイイタイ病、四日市をかなり多めにやる。毎年テストで、「水俣でヤマを張っていたのに四日市出しやがって」という文句が出るぐらいなのです。それでも水俣から得られる教訓ということは一応整理をして、いろんな立場の人がいるということは、いつも大事に教える様にしております。企業側だけの視点では見られないし、一方でその被害者側の視点だと立ち位置が違いすぎて、お互い影みたいに

隠れてしまう。だからそれを意識しないと、このずれは永遠に続くということで、多角的な視点を持つということを、水俣を通して教えています。
水俣に連れていけるといいのですが、ちょっと難しいので、去年ちょうど判決50周年ということで、四日市の公害訴訟の50周年にようやくゼミ生を連れて行きました。日々、私も悩んでいますが、やはりそういう感想は他人事だよねっていうのが、一番突き刺さりました。その先を伝えられることをできるといいかなと思っているところです。すいません雑駁な感想ですが、よろしいでしょうか?

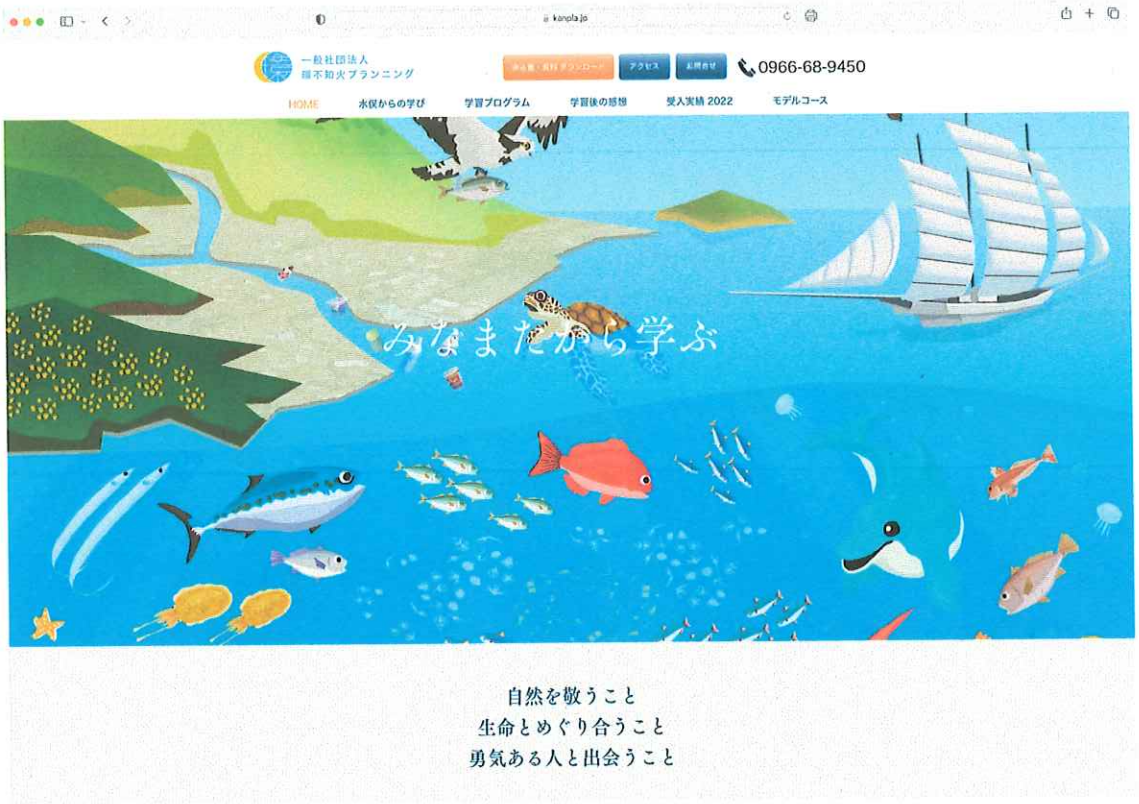
司会進行:竹中
はい。ありがとうございます。
そろそろ時間になってきました。せっかくオンラインでこうやって繋がっているので、もっとお話したいのはあるのですが、そろそろまとめさせていただきたいと思います。今日何回も言われてきた「モヤモヤする」とか、「自分ごととしていかに考えるか」とか、その辺が本当にね、大きい大きいテーマというか、一つに括れない、大切にしなければいけないポイントと思いました。
小中高大いろいろあるのですが、やはり本気で考えてほしい。本音と建前って必ず物事にはあると思います。きれいに終わらせないで自分ごととして考える。授業ってともすると、「本音を出す」って言いながら、実は「本音に見えた建前」に終わったり、きれい事を言っていたり。そうすると自分の本当の生活が自分の人生には繋がっていかないと思ったりします。
その辺、本当にいろんな角度から切り取りながら、出会わせながら、きれいごとで終わらせないように物事を考えていく、考え続けるという示唆にあふれたお話だったと思います。簡単なまとめにはなってしまいました。なかなか言葉でまとめきれないところもあります。稲田先生本当にありがとうございます。

稲田校長
ありがとうございました。

※オンライン上で、質問や感想をお話しくださった方のお名前は、すべてイニシャルで表しています。

主　　催	水俣から學ぶティーチャーズネットワーク
共　　催	(社)環不知火プランニング
助　　成	熊本みらい基金
協　　力	神戸市小学校教員　竹中美香子
コーディネーター	(社)環不知火プランニング代表　森山亜矢子

◆ 記録の共有化について



一般社団法人環不知火プランニングＨＰのダウンロードページ（下記）にサンプルと申請書類を設置。 https://www.kanpla.jp/download

申請を行えるようにしました。申請書は別紙参照ください。

教員向け資料

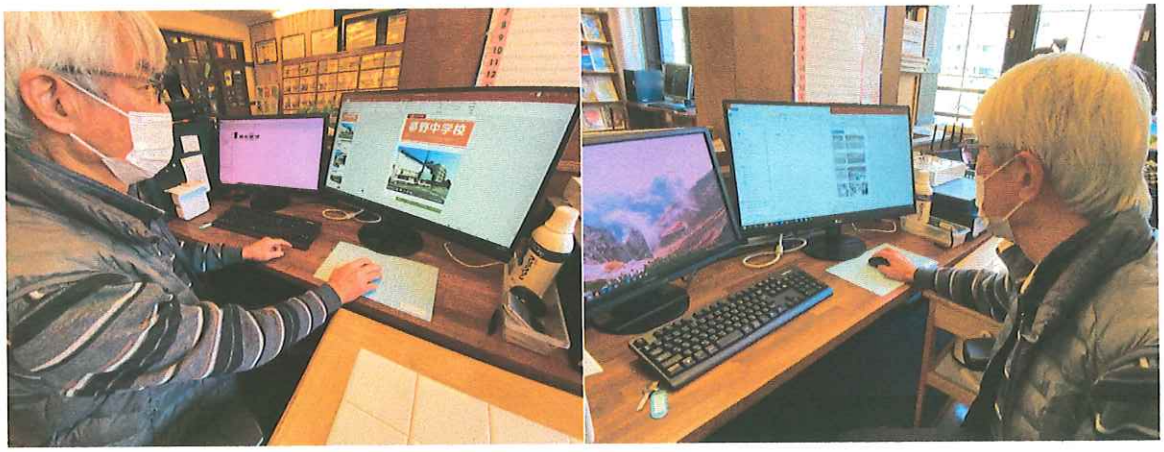
広瀬先生教育講演会（2021.11.12）記録サンプル	ダウンロード
上記　広瀬武先生講演会データ使用申請書	ダウンロード
梅田卓治先生オンライン講演会（2022.6.25）記録サンプル	ダウンロード
上記　梅田卓治先生オンライン講演会データ使用申請書	ダウンロード
稲田泰典校長オンライン研修（2023.1.7）記録サンプル	ダウンロード
上記　稲田泰典校長オンライン研修データ使用申請書	ダウンロード
緒方俊一郎先生（医師）ヒアリング（2022.12.29）記録サンプル	ダウンロード
緒方俊一郎先生（医師）ヒアリングデータ使用申請書	ダウンロード

2023.1.17 神戸アーカイブ写真館　代表　東 充さんヒアリング

阪神淡路大震災から28年を迎える日にあわせ、神戸アーカイブ写真館代表の東さんに画像（写真）を中心とした記録保存についてのヒアリングをさせていただいた。
東さんは元々長田区で商売をされていたが、地震による火災のため全焼。住む場所も生きる糧を生み出す場所も失った。それを機会に写真の素人であるにも関わらず、それぞれの想いが詰まった写真に対する被災者の思いに気づき、震災の画像とアーカイブの保存が融合して、活動は今に至っている。

素人から始めた写真の世界だが、長田区全体の仕事も任されるうちに神戸全体の写真を任されるようになった。現在20万点の写真がデジタル保存されている。スキャニングするだけではなく、場所、年代まで整理されているため、同じ場所がどのように時代とともに変遷したのかまで把握することができる。写真館にある紙媒体は、パワーポイントで自己印刷、自己製本。とても素朴な出来上がりだが、徹底的に整理されていて大切なことが網羅されているように感じた。

写真を芸術化せず「誰が見てもわかる」という観点を大切にされている。神戸市内から日々運び込まれる写真と格闘中だが、２８年経ったいま、やっとひと段落したとのこと。さらには、６０箱何百万枚分のネガ(ガラス板)も保有されていて整理されるのを待っている。何を保存して何を捨てるのか？というルールを明確にしていて、原板は基本的に返却としている。画像の整理はパワーポイントで行っていて、目から鱗がとれる思いがした。プロやセミプロの写真は、被写体がアップになりすぎていて、時代や場所などが判別できないというお話もされた。



写真の活用先は、教育現場が最も多い。パネルも作成しているので、イベントの時にはこれらを使用する。徹底的に整理されているので、イベントのさまざまなテーマに対応できると思われる。体験学習も実施していて、一元化窓口を作り、料金も決めて有料で実施している。体験者とのまち歩きも行っていて、語りをする際には講堂なども使用している。

大変お忙しいタイミングであったにも関わらず、お時間を割いていただき感謝の言葉を述べて、神戸アーカイブ写真館をあとにした。

KOBE ARCHIVE

神戸アーカイブ写真館

昔懐かしい神戸にタイムスリップしてみませんか？

神戸開港から阪神・淡路大震災までの写真を中心に20万点余を、時代別・テーマ別などにわかりやすく整理・分類し、ディスプレイ・パネル・冊子などで気軽に閲覧していただくことができます。
昔懐かしい写真を見て楽しむだけでなく、市民のみなさまの交流や学びの場としてもご活用ください。

◆ご利用案内

所在地

神戸市長田区二葉町 7-1-18
神戸市立地域人材支援センター３F
TEL&FAX：078-642-2355

開館時間

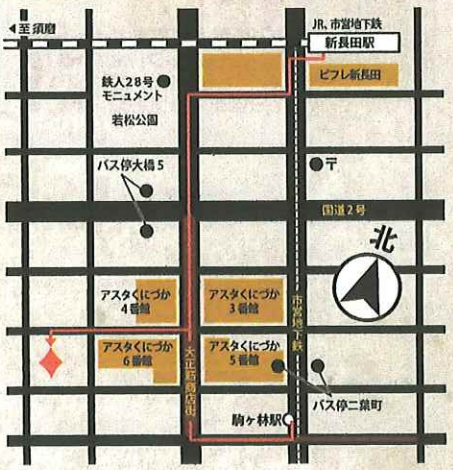
10：00～17：00

休館日

月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月28日～1月5日）

◆交通アクセス

- 地下鉄海岸線「駒ヶ林駅」から徒歩約６分
- JR、地下鉄西神・山手線、地下鉄海岸線「新長田駅」から徒歩約13分
- 市バス「大橋５」バス停から約７分
- 市バス「二葉町」バス停から約６分
- 有料駐車場有り
  1台30分につき100円（上限額1,000円）



写真は語る 温故知新の心

神戸アーカイブ写真館 代表
東 充

●震災復旧・復興で大切なポイントは――

すぐに気持ちを切り替えて、復旧に向け団結して進む。このスピード感が大切です。それが復旧・復興を良い方向に動かす勝負の分かれ目です。時間を掛けていたら、早く商売の場を取り戻したいと言う必死な気持ちもバラバラになり、前に進むことも無理になったと思います。しかも私たちが計画したパラールは100店舗が集う仮設店舗村。通常100店舗が入る施設計画といえば何年もかかる事業です。

完成した時はみんな笑顔でしたね。6千から7千人の方が毎日訪れてくれるのですから。商店街では出来なかった貴重な体験だったと思います。

そして、もうひとつ大切なことは、震災より前からあった問題点を「震災復興」という作業の中で忘れないことです。それぞれのまちには、経済活動を支える特色があります。それを再認識して無理のない復興を推進することです。

●震災復旧に携わり苦労されたことは――

あの時は、「時間がない、早く動かなければ」「まちのために、今やらなければ」と言う気概の方が強かったと思いますね。私の店舗があった鉄筋コンクリート三階建ての「丸は市場」も内部に火がまわり、昼夜なく燃え続けて全焼してしまいました。それを見て、復旧にすべてをあてる決意をしました。それからは会合やまちづくり協議会の立ち上げ準備、神戸市との折衝・調整などに走り回る日々が続き毎日があっと言う間に過ぎて行きました。とにかく復旧に向けて早く仮設の店舗、住むところが欲しいという要望が数多く、土木工事から建設、管理運営まで一気にわずか5ヶ月でやらなければならない。今、思えば毎日がしんどいことの連続でしたね(笑)。

商売人は、商売をする場を失ったら、食べる糧がなくなり、生きがいも失ったようなものです…この気持ちは被災した商店街のみなさん誰もが同じだったと思います。気がつけば仮設店舗村パラールの建設に向け一丸となって取り組んでいました。

●神戸アーカイブ写真館のきっかけは――

再開発ビル完成までの5年間はパラールの管理運営とまちづくりに携わりました。その後、神戸長田コンベンション協議会をつくり、震災学習で全国から訪れる学校の受け入れ統括や、被災で消失したまちの写真を再収集し、整理・デジタル化する業務を行いました。それが神戸アーカイブ写真館の設立に繋がったのです。これからも貴重な写真の収蔵を続け、震災で失った小中学校のアルバムにも気軽に出会えて語り合える、そんな場にしたいですね。写真には写真の力があるので、外部に出て「語り部講座」のようなことを実施するのも大きな役割だと思っています。

鉄飛

●プロジ

新長
り出し
ベントの
ました
続性や
う感じ
です。そ
28号」。
育ち、
輩、お
く漫画
はかつて
運命的
いう気
た時に
言って
上で描
決まって

●プロジ

モニ
いう位

移動ギャラリー展

神戸市内の図書館を定期的に移動しながらの懐かしい写真を満載した様々なパネル展を開催しています。

過去の内容

「神戸市交通史パネル展」「川西英の神戸百景パネル展」「神戸の小中学校懐かし写真パネル展」など

ギャラリー企画展

3階のオープンスペースギャラリーでは、毎月様々な懐かしい写真パネル展示やレトロ映像の上映を行っています。

過去の内容

「神戸交通史写真パネル展」、「防災月間パネル展」、「震災関連パネル展」、「昔懐かしい歴史パネル展」など

昔語り講座

当館のスタッフが各地域に出向き、昔懐かしい写真をもとに、みんなで語り合う「昔語り講座」を、区役所と連携して開催しています。想い出話に花を咲かせ、その時代に流行った歌を歌いませんか。

写真に関する各種ご相談承ります

- ●保存写真の閲覧・借用、昔の個人写真等の相談
- ●写真の整理保存
- ●写真パネルの製作・貸出し など

その他、写真や資料等に関するご相談は、当館スタッフへお気軽にお尋ねください。

◆交通アクセス：

- ●地下鉄海岸線「駒ヶ林駅」から徒歩約6分
- ●JR、地下鉄西神・山手線、地下鉄海岸線「新長田駅」から徒歩約13分
- ●市バス「大橋5」バス停から約7分
- ●市バス「二葉町」バス停から約6分
- ●有料駐車場有り。最初の30分無料／以降30分100円（上限額800円）

◆ご利用案内：

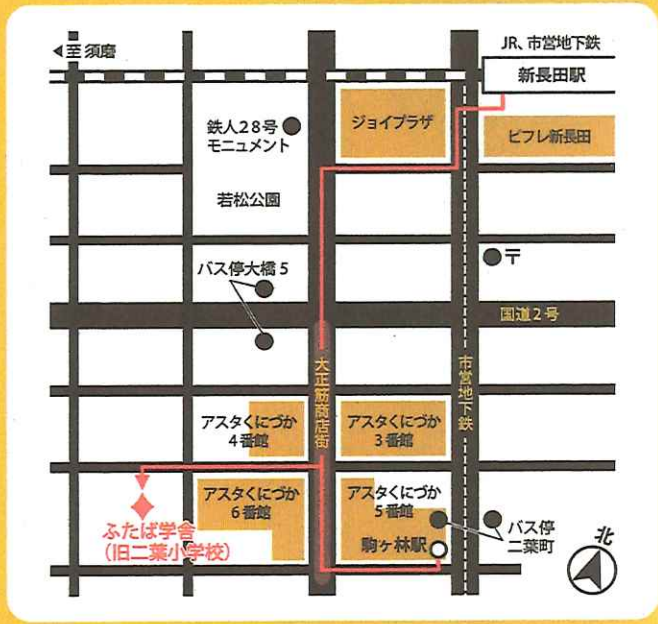
所在地 神戸市長田区二葉町7-1-18
ふたば学舎（旧二葉小学校）・3階
TEL&FAX：078-642-2355

開館時間 10：00～17：00

休館日 月曜日・原則日曜日（祝日の場合はその翌日）、
年末年始（12月28日～1月5日）

◆お問い合わせ：

TEL&FAX 078-642-2355
Eメール kobenagatacc@abeam.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.kobe-shashinkan.jp



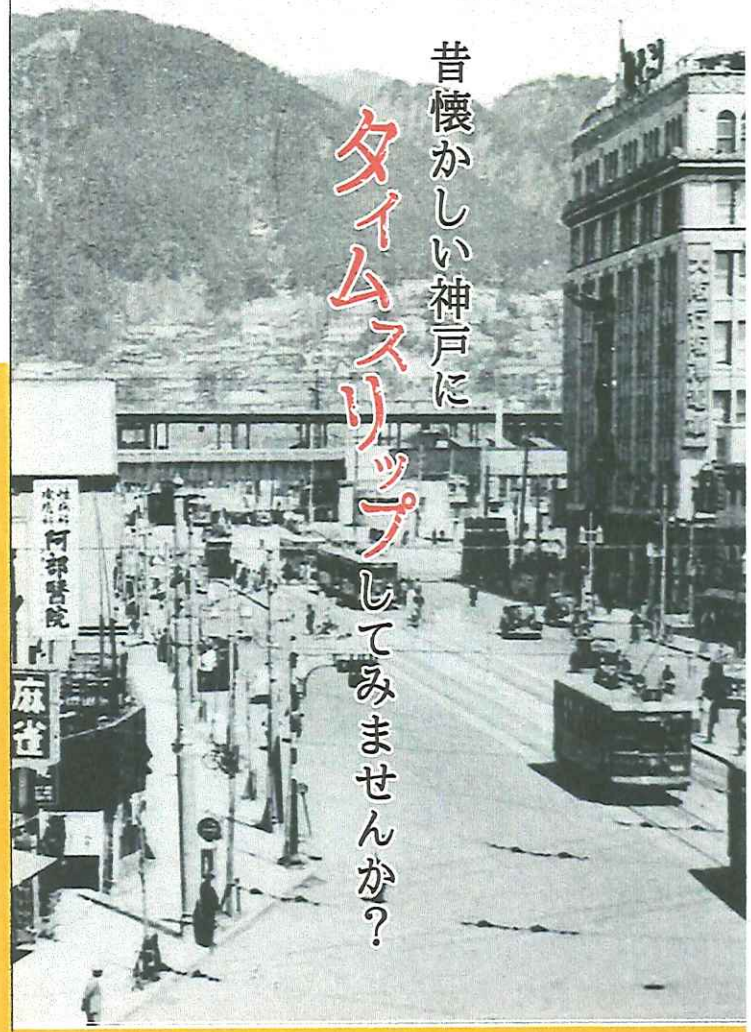
神戸アーカイブ写真館

神戸市広報課／管理運営：長田ハナミズキ倶楽部

神戸の歴史がここにあります

KOBE ARCHIVE

神戸アーカイブ写真館



神戸アーカイブ写真館とは?

神戸市では、広報課や文書館などで保存している記録用写真フィルムのデジタル化を行ってきました。
区役所や神戸市内小中学校及び地域の方々に協力・提供していただいた写真も集約し、市民の皆様に無料で閲覧していただける「神戸アーカイブ写真館」を開設しました。

館内では、神戸港開港から阪神・淡路大震災までを中心に約24万点の写真を、時代別・テーマ別などにわかりやすく整理・分類し、パソコン・パネル・冊子などで気軽に閲覧していただくことができます。
昔懐かしい写真を見て楽しむだけでなく、市民のみなさまの交流や学びの場としてもご活用ください。

館内展示

レトロ写真

パソコン・タブレット（タッチパネル）で、約20万点の懐かしい神戸の写真を、年代・区名・各種のカテゴリーを入力して検索・閲覧できます。

写真冊子

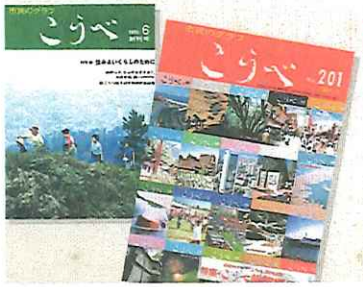
「六甲歴史散歩」や「神戸交通史」、「源平史跡巡り」など、様々なテーマに沿って編集した写真冊子、約460冊を閲覧できます。

専門図書

神戸の歴史や史跡・昔懐かしい神戸の写真集など、神戸アーカイブ写真館ならではの専門図書を揃えています。

レトロ映像

街並みや観光地など懐かしい神戸の映像を、大型テレビで視聴できます。



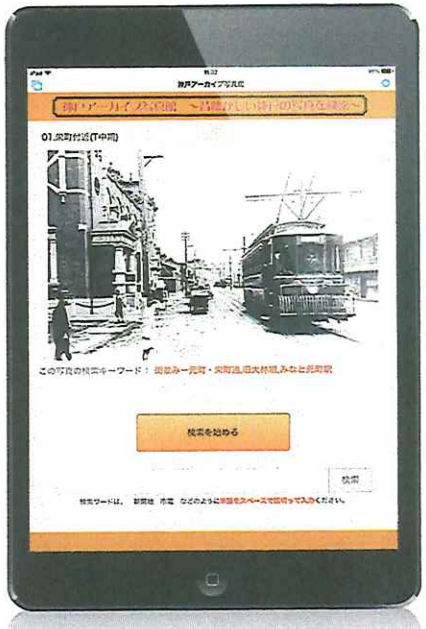
「市民のグラフ こうべ」

昭和45（1970）年の創刊号から、平成17（2005）年1月の315号まで、「市民のグラフ こうべ」の全号を閲覧できます。

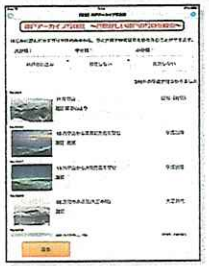
ふれあいの場として

館内中央には、大型の【ふれあいテーブル】を設置。
交流や学びの場など、いろいろな用途で利用できます。

懐かしい神戸の写真を
当館内のパソコンやタブレット端末で
簡単に検索、閲覧していただけます！



検索条件ページ



検索結果一覧ページ

詳細ページ

当館が所蔵する
画像データを
簡単・気軽に
検索・閲覧できます！

※写真はタブレットの
検索画面です。

神戸に大地震は起きない。そんな過信を一瞬にしてマグニチュード7.3の揺れが砕いた。

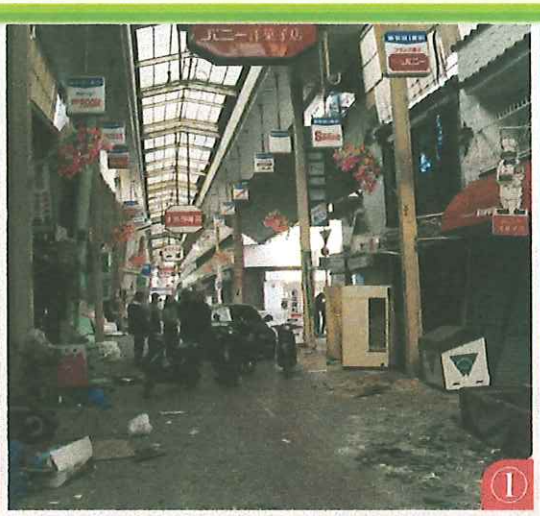
平成7年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災。長田区で亡くなられた方921人・全半壊棟数23,803棟・火災被害軒数4,833軒と、未曾有の大災害をもたらしました。新長田地区においても新長田駅南一帯及び大正筋商店の商業集積は大火災によって甚大な被害を受けました。

写真上は大正筋を中心とする商店が集まった地区です。商店街のアーケードが、火の通り道となり、東西南北に広がって連なる商店街・市場などに延焼していきました。ちなみに、神戸市全体の地震による火災被害建物数の約70%は長田区で占められています。

新長田駅の南側一帯には、ケミカルシューズ関連の多くの問屋がありましたが、燃えやすい材質が多いことから、火災によって跡形もなく燃え尽きてしまいました。

阪神・淡路大震災が発生

②


①

④

③

⑥

⑤

①②は、新長田一番街商店街ですが、大火災は避けられたものの、倒壊した家屋や、家が傾いたりする半壊家屋が多く見られました。

③④は商店街の両側の商店が焼き尽くされた焼け跡です（二葉町5・6丁目ダイエー西神戸店付近）。右上は二葉5・6丁目の中間付近で風の向きが変わったことにより、この位置から南側の商店街の火災は免れることができました。

⑤大正筋から西神戸センター街を望む被災状況ですが、丸は市場も火災で焼失してしまいました。

丸は市場の建物の1階部分が崩れ南へ倒れたため、その部分だけアーケードが曲がっている様子がわかります。

⑥次々と燃えつくしながら迫り来る火災によって、人々は着の身着のままで、避難先の二葉小学校に集まっていきます。学校の後には迫ってくる火災の煙が大きく見えます。